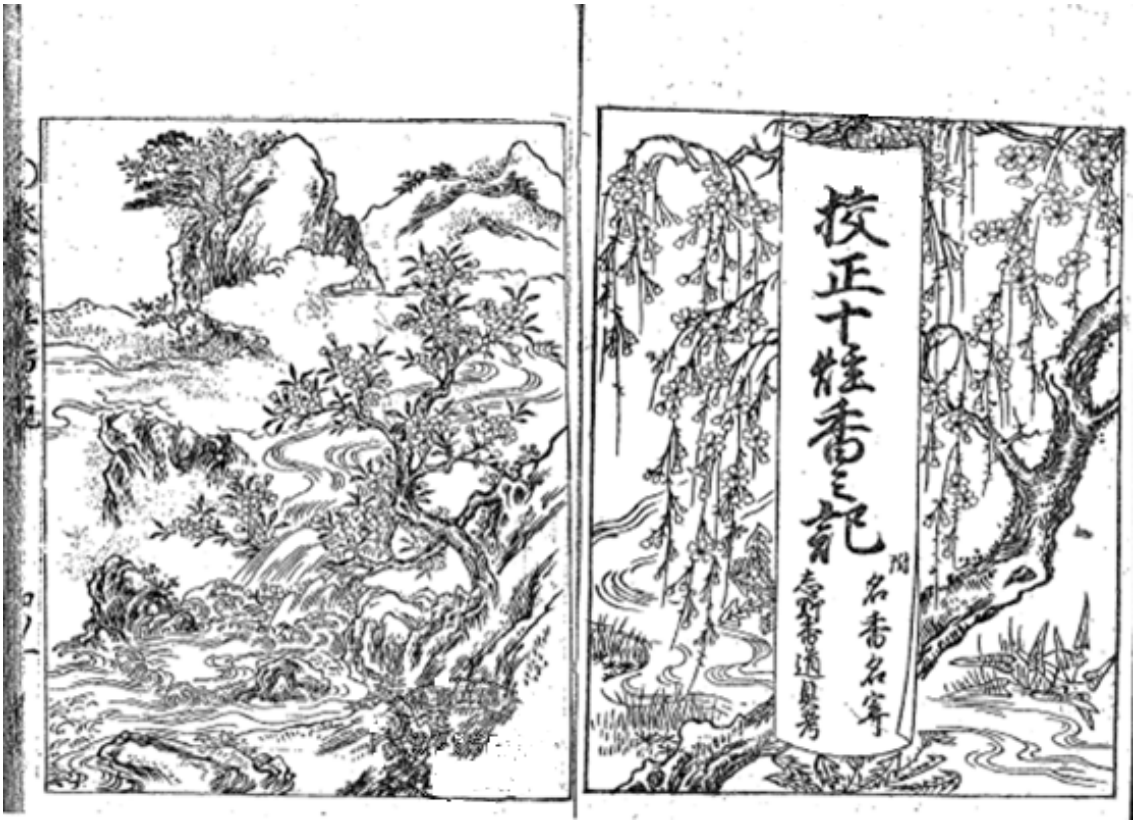


校正十炷香之記

附

名香名寄

志野香道具考

大枝流芳編　元文四年　一冊　版本

大阪府立図書館　所蔵

［挿絵］

【凡例】

① 句読点、「」、送り仮名等は適宜追記しました。

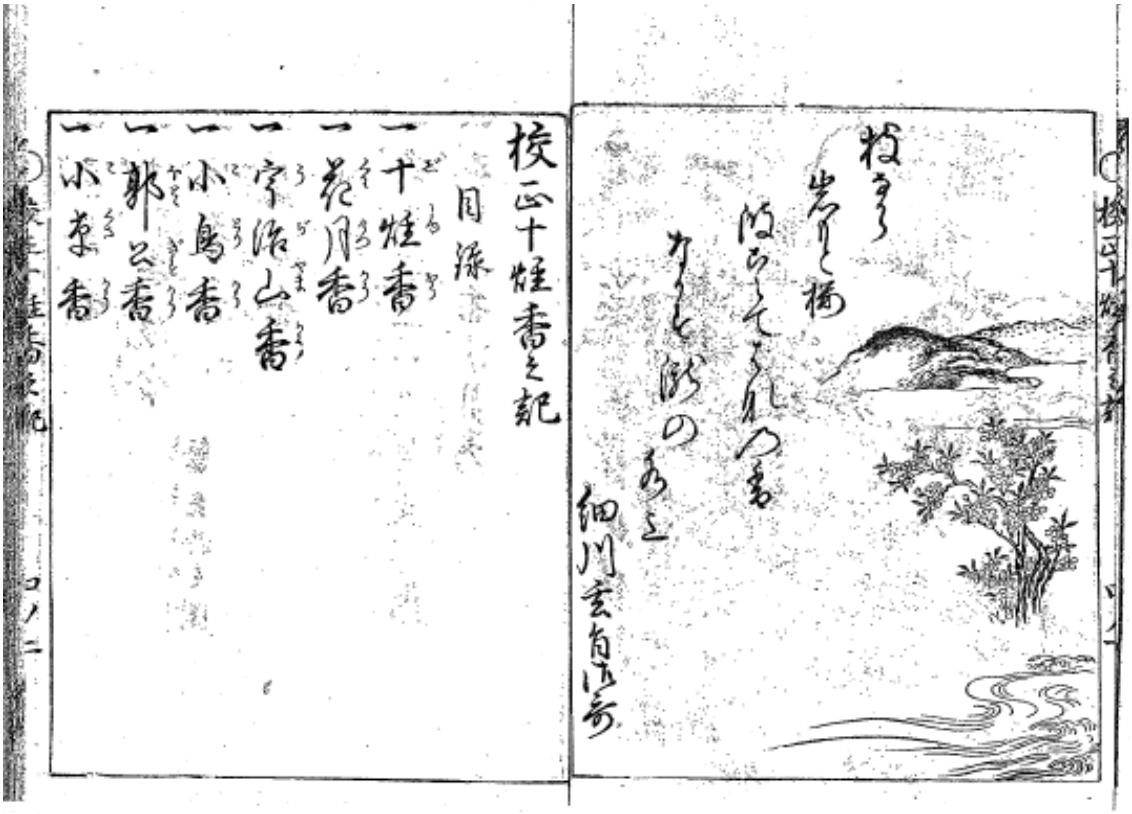
② 旧仮名使いを新仮名使いに適宜改めました。

③ 黒字の（）は、本文内に小文字で記された注記です。

④ 青字の（）は、筆者の補足です。

⑤ 赤字は、判読等に曖昧な点がある部分です。

⑥ 文字囲みは、大枝流れ芳の校正部分です。



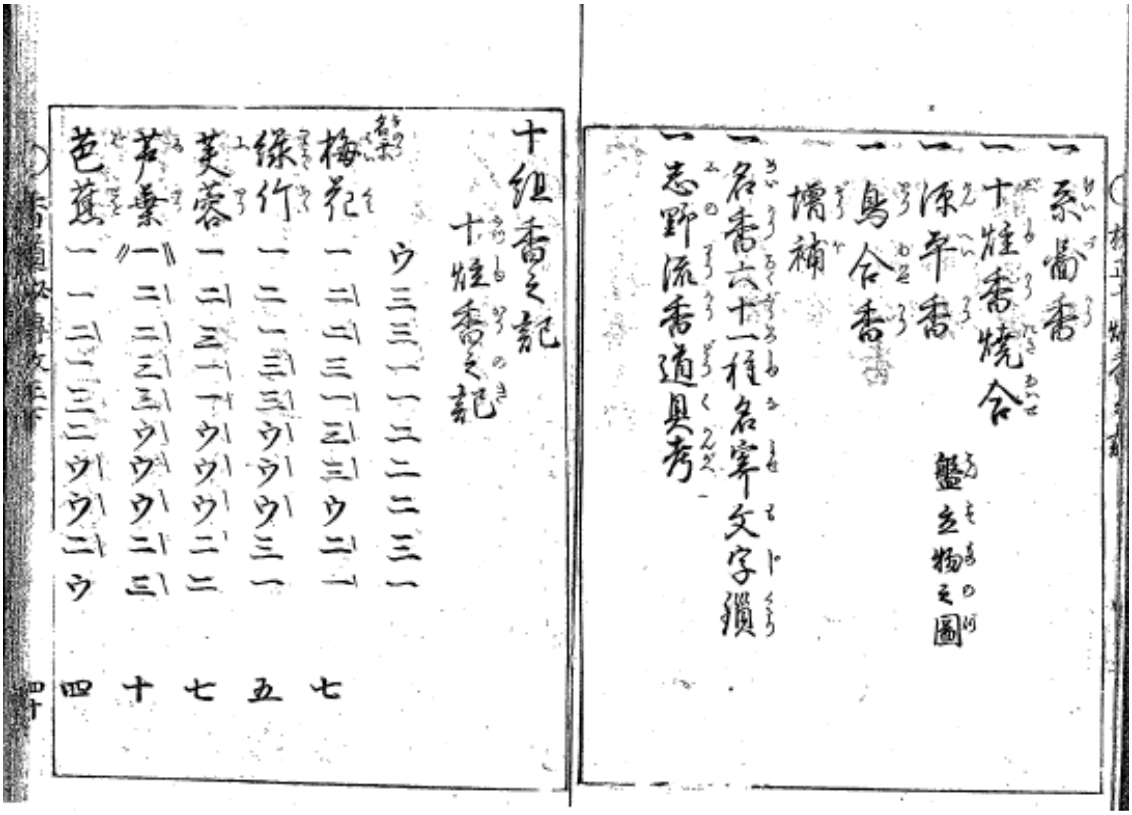
枝ながら
岩もと桜
波こえて　はなの香
ながす　瀧の
水上

細川玄旨御歌
（幽斎の法名）

校正十炷香之記

目録

一 十炷香（じっしゅこう）
一 花月香（かげつこう）
一 宇治山香（うじやまこう）
一 小鳥香（ことりこう）
一 郭公香（ほととぎすこう）
一 小草香（こぐさこう）



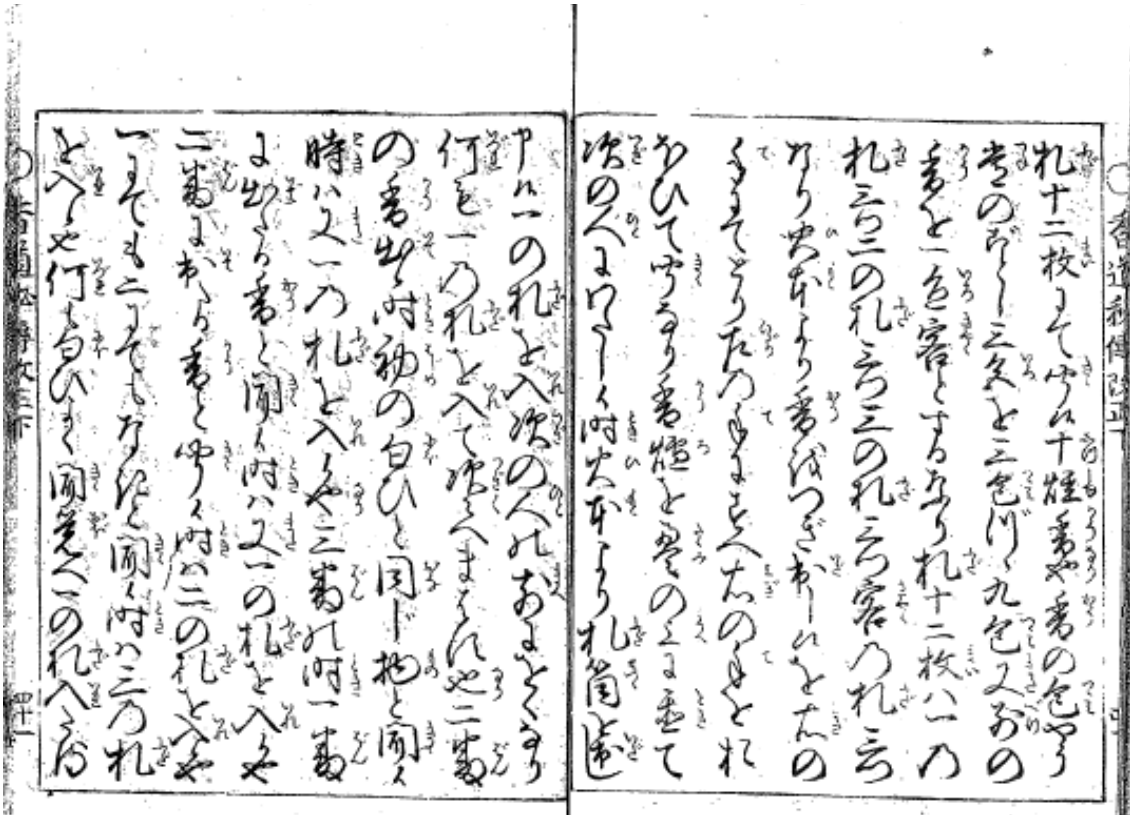
一 系図香（けいずこう）
一 十炷香焼合（じっしゅこうたきあわせ）
一 源平香（げんぺいこう）　盤立物の図
一 鳥合香（とりあわせこう）

増補

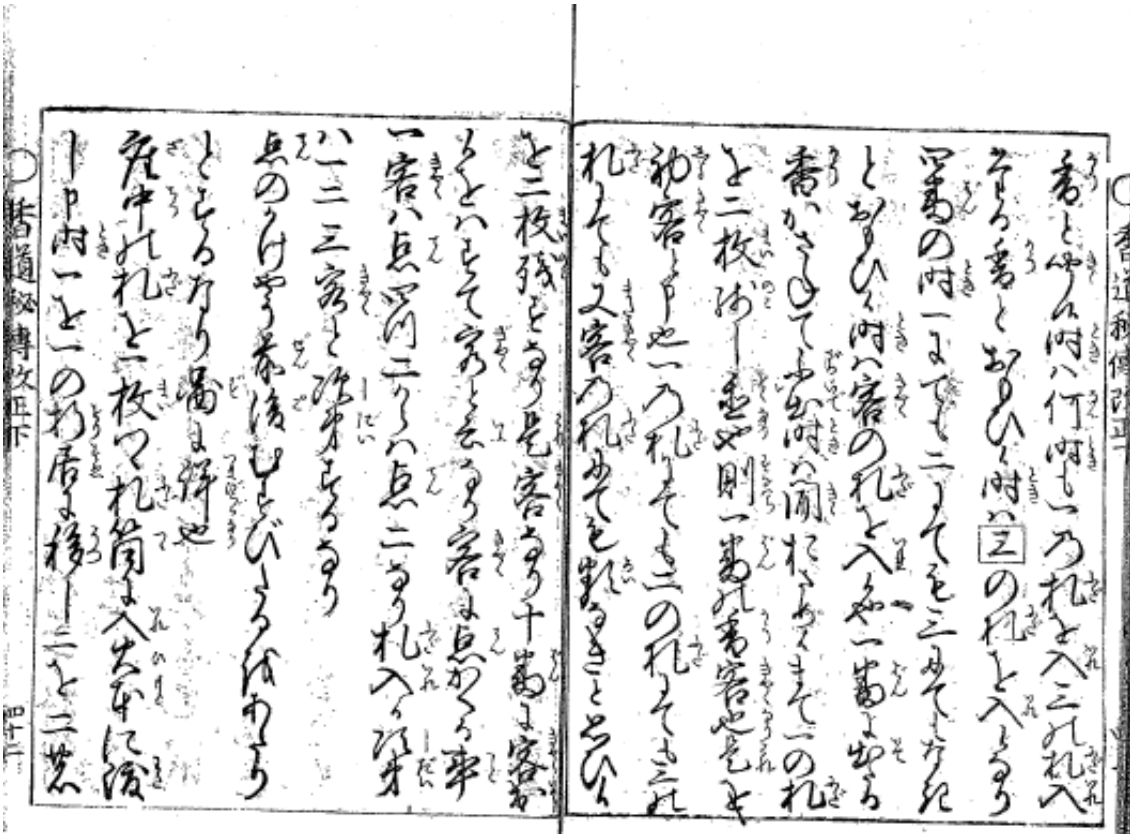
一 名香六十一種名寄文字鎖
一 志野流香道具考（かんがえ）

十組香之記

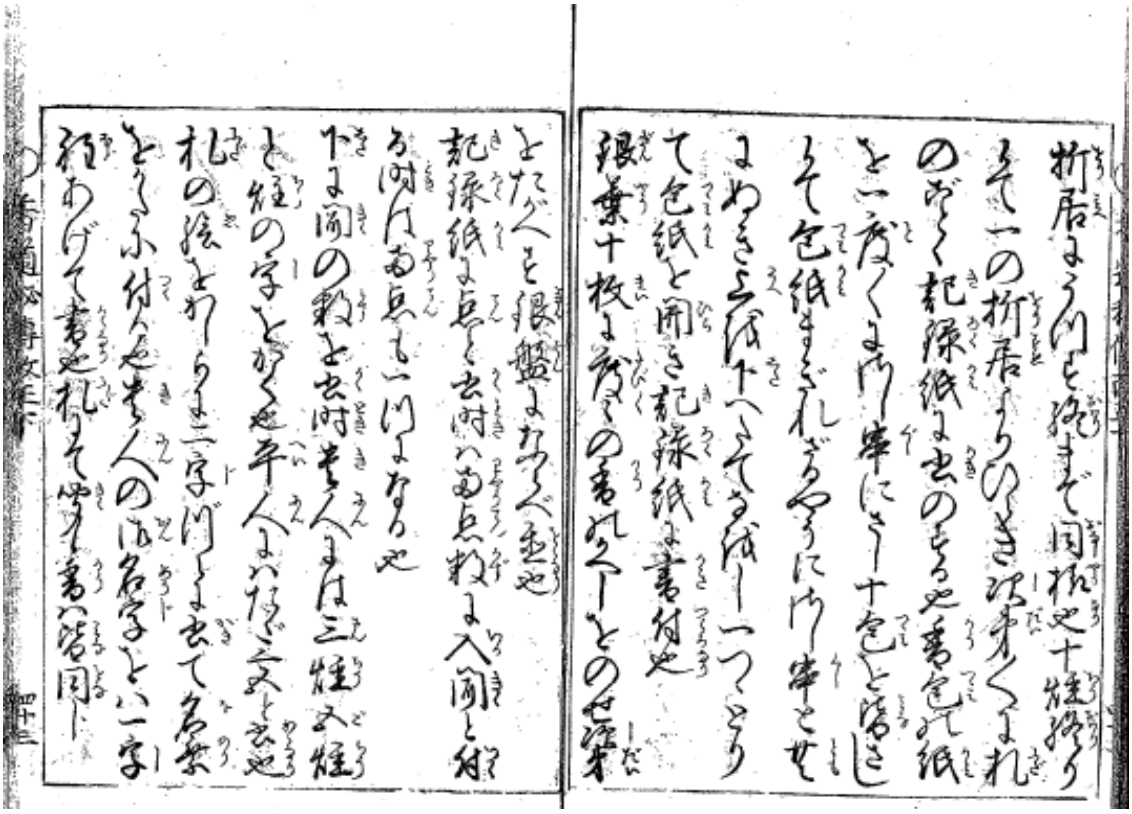
○十炷香之記



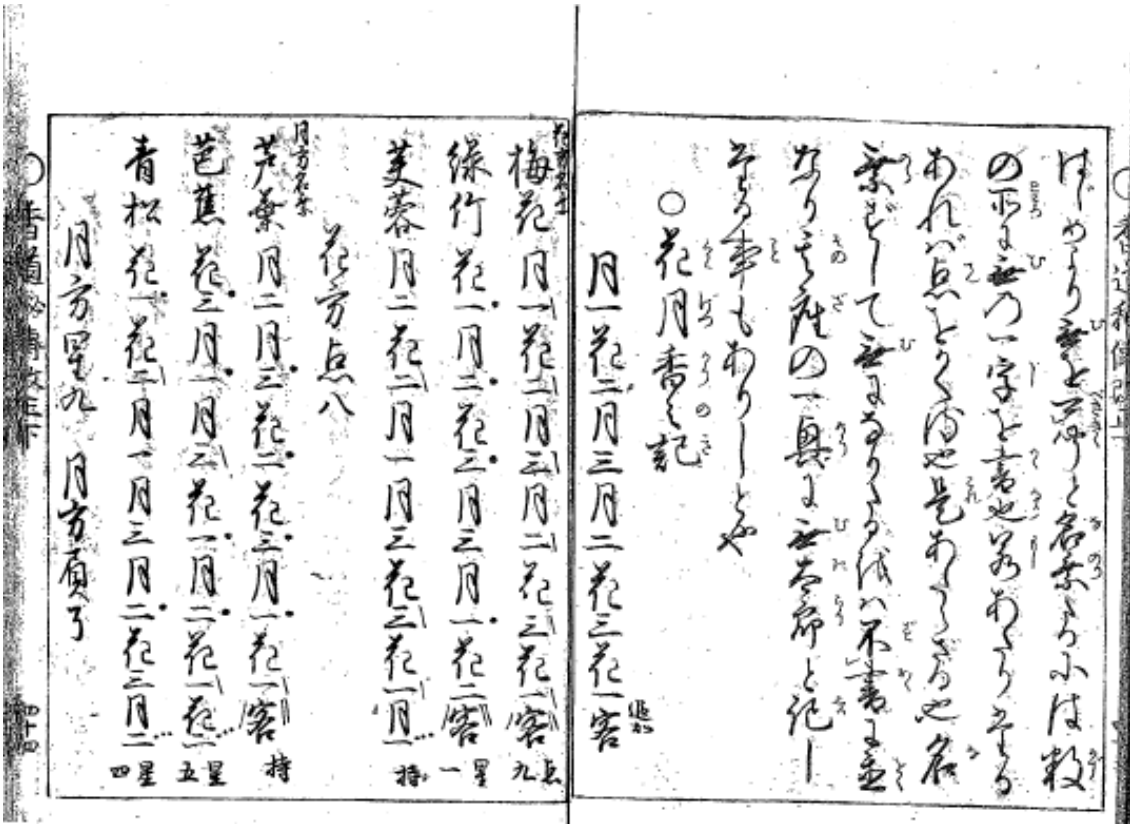
札十二枚にて聞き候、「十炷香」なり。香の包みよう常のごとし。三色を三包ずつ九包。また別の香を一色「客」とするなり。札十二枚は「一」の札三つ、「二」の札三つ、「三」の札三つ、「客」の札三つなり。火本（香元）より香をつぎ出し候を右の手にてとり、左の手にすえ、右の手をおおいて（覆）聞くなり。香炉を畳の上に置きて、次の人にわたし候時、火本より「札筒」を出し申し候。「一」の札を入れ、次の人の前におくなり何れも「一」の札を入れて次々へまわすなり。二番の香出で候時、初めの匂いと同じ物と聞き候時は、また「一」の札を入れ候なり。三番の時、一番に出たる香と聞き候時は、また「一」の札を入れ候なり。二番に出たる香と聞き候時は「二」の札を入れ候なり。「一」にても「二」にてもなきと聞き候時は「三」の札を入れ候なり。何れも匂いよく聞き覚え、「一」の札入れたる



香と聞き候時は、何時も「一」の札を入れ、「三」の札入れたる香とおもい候時は、三の札を入れ候なり。四番の時、「一」にても「二」にても「三」にてもなきとおもい候時は「客」の札を入れ候なり。一番に出たる香かさねて出ざる時は、聞きおさめ候まで「一」の札を二枚残し置くなり。則ち一番の香、「客」（客香）なり。これを「初客」と申すなり。「一」の札にても「二」の札にても「三」の札にても、また「客」の札にても類なきと思い候を二枚残すなり。これ「客」なり。十番に「客」出候をば「すて客」と云うなり。「客」に点かくる事、一客は点四つ、二からは点二なり。札入れ候次第は「一」、「二」、「三」、「客」と次第するなり。点のかけよう、前後むすびたるをあたりとするなり。図に詳（つまびらか）なり。座中の札を一枚ずつ「札筒」に入れ、火本に渡し申す時、一（炉目）を「一の折居」に移し、二を「二の

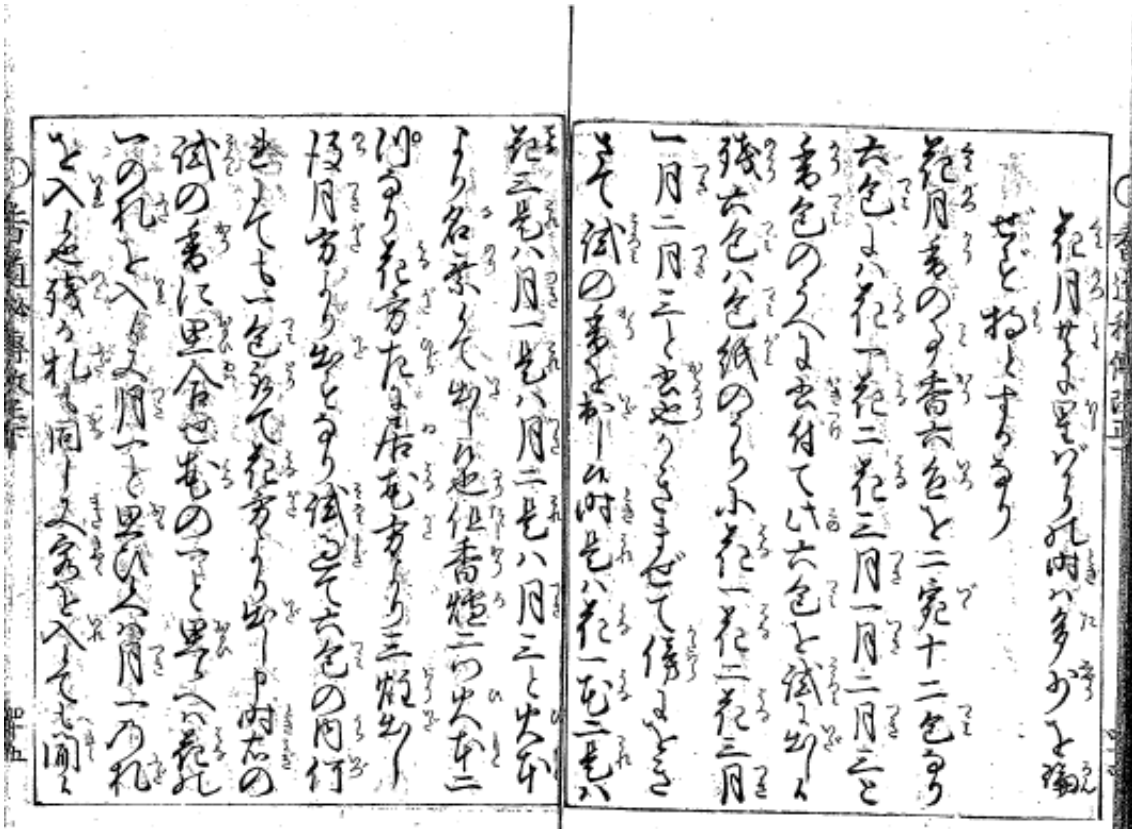


折居」にうつす。終わりまで同じ様なり。十炷終わり
候て、一の折居よりひらき、次第次第に札
のごとく「記録紙」に書きのする(載)なり。香包の紙を
一度一度に「さし串」にさし、十包を皆さし
候て、包紙まぎれ(紛)ざるように「さし串」と共
にぬき、上を下へたてなおし、一つとりて
包紙を開き、記録紙に書付くるなり。
「銀葉」十枚に度々の香のかえしをのせ、次第
をたがえず「銀盤」にならべ置くなり。
「記録紙」に点と書く時は、「両点(客の当たり)」、数に入る。
「聞」(点数)と付く
る時は、「両点」も一つになるなり。
下に「聞」の数を書く時、貴人には「三炷」「五炷」
と「炷」の字を書くなり。平人にはただ「三」「五」と書くなり。
「札の絵」(札紋)をかしらに二字ずつに書きて、「名乗(なのり)」
をかた(肩)に付くるなり。貴人の御名字をば、一字
程あげて書くなり。札にて聞く香は皆同じ。



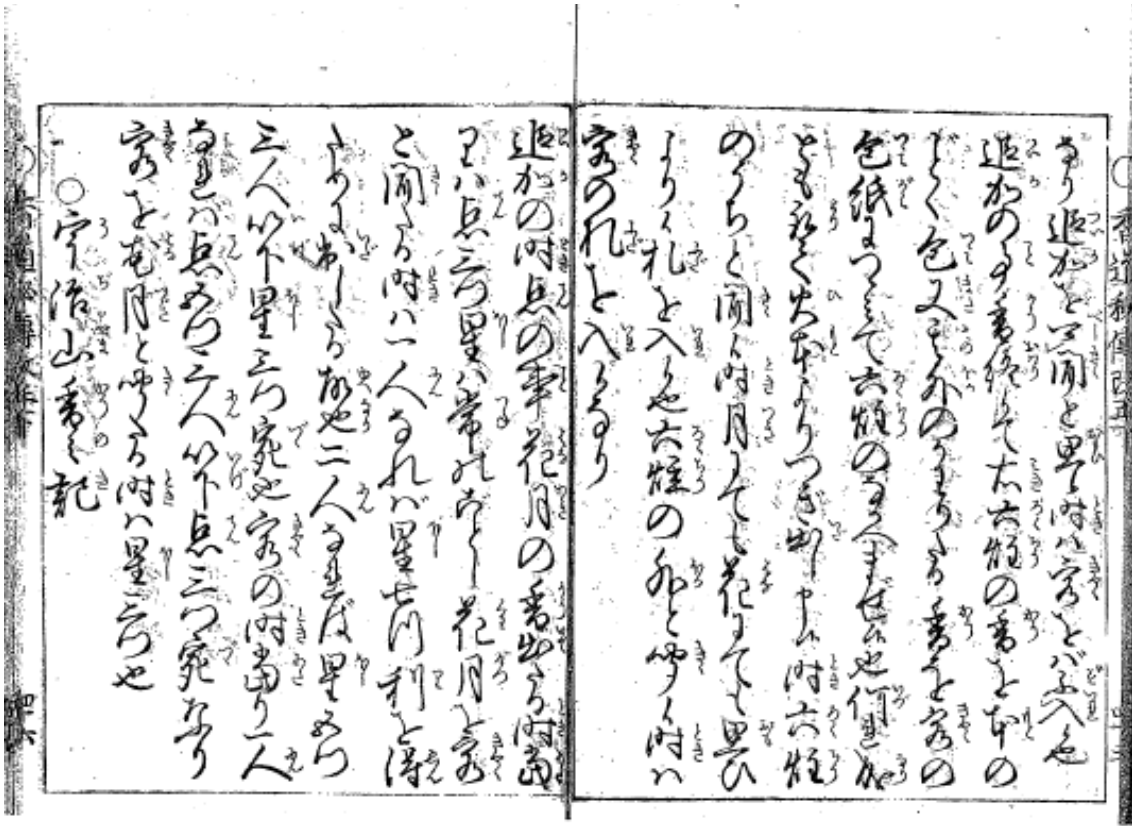
はじめより「無を聞くべき」と名乗りたるには、数の所に「無」の一字を書くなり。もし、あたりたるあれば点をかくるなり。これ、あたらざるなり。名乗らずして「無」になりたるをば、書かずに置くなり。その座の一興に「無太郎」と記したることもありしとや。

○花月香之記



「花」、「月」共に星ばかりの時は、多少を論
ぜず「持」とするなり。

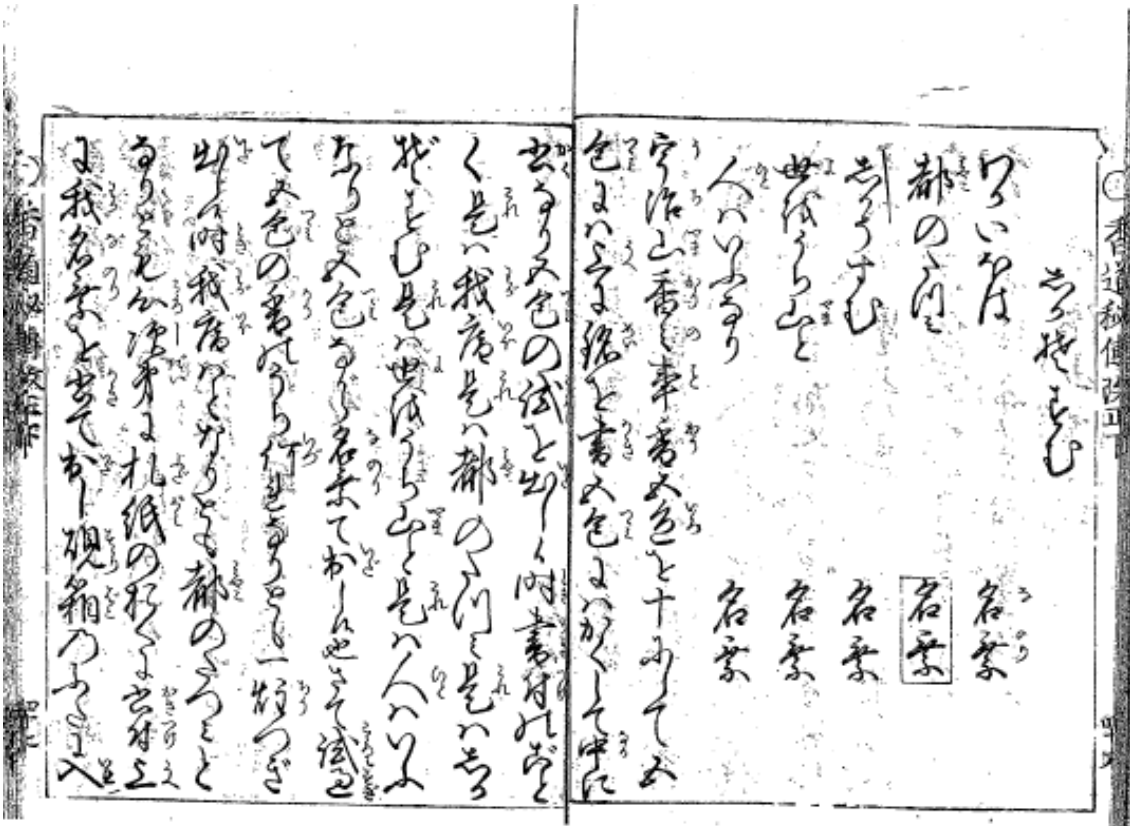
「花月香」の事、香六色を二ずつ、十二包なり。
六包には「花一」、「花二」、「花三」、「月一」、「月二」、「月三」と
香包のうえに書き付けて、この六包を試みに出し候。
残り六包は、包紙のうちに「花一」、「花二」、「花三」、「月
一」、「月二」、「月三」と書くなり。かきまぜて傍らにおき、
さて、試みの香を出し候時、「これは花一」、「(これは)花二」、「これは
花三」、「これは月一」、「これは月二」、「これは月三」と火本(香元)
より名乗り候て出し候なり。但し、香爐二つ、火本二
つ(二人)なり。「花方」、左に居、「花方」より三炷出し
後、「月方」より出すなり。試み過ぎて六包の内、
何れにても一包取りて「花方」より出し申す時、右の
試みの香に思い合わせ、「花の一」と思えば「花の
一」の札を入れ候、また「月一」と思い候えば「月一」の札
を入れ候なり。残る札も同じ。また「客」を入れ候ても聞き候



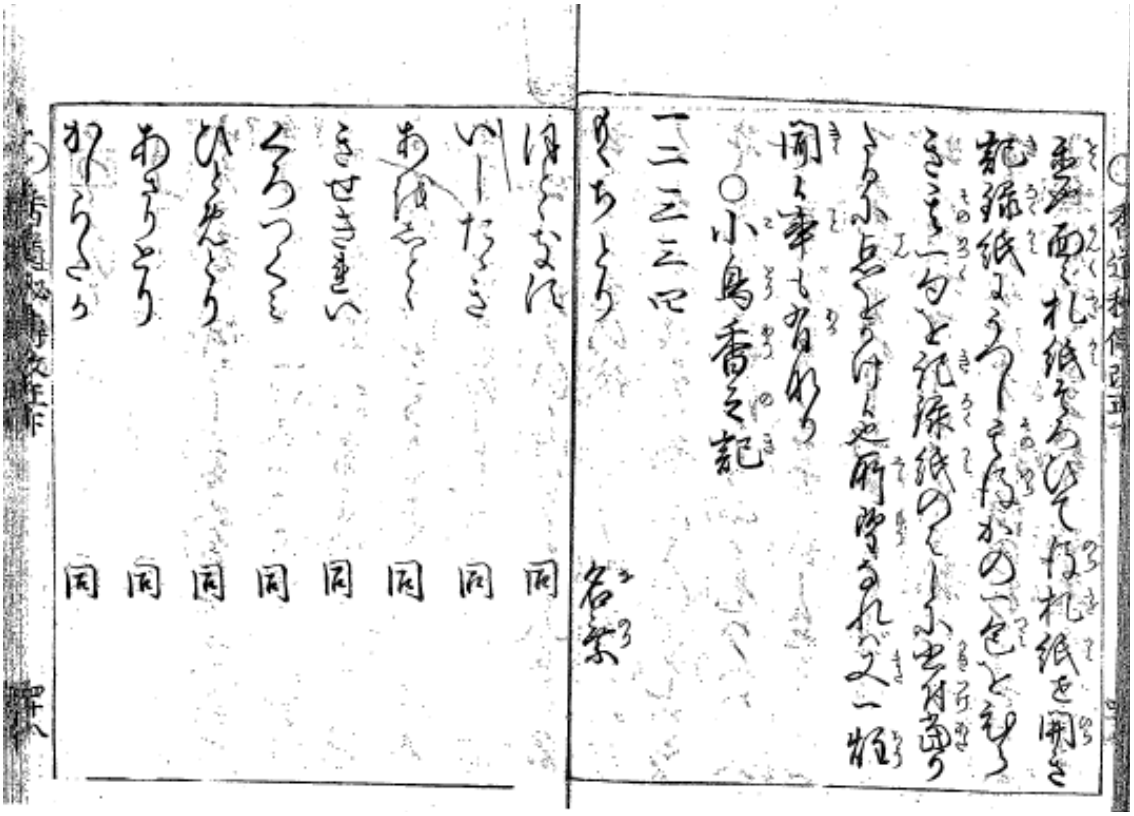
なり。追加を聞くべしと思い候時は「客」をば入れず候なり。追加の事、香終わりて、右、六炷の香を本（もと）のごとく包み、またその外のかわりたる香を「客」の包紙につつみて、六炷のなかへまぜ候なり。何れ成りとも取りて、火本よりつぎ出し申し候時、「六炷のうち」と聞き候時、「月」にても「花」にても思いより候札を入れ候なり。「六炷の外」と聞き候時は、「客」の札を入れ候なり。

追加の時、点の事、「花・月」の香出ざる時、当りは点三つ、星は常のごとし。「花・月」を「客」と聞きたる時は、一人なれば星七つ、利を得んために出したる故なり。二人なれば星五つ、三人以下（いげ）、星三つずつなり。客の時、当り一人なれば点五つ、三人以下、点三つずつなり。「客」を「花・月」と聞きたる時は星三つなり。

○宇治山香之記



「宇治山香」の事、香五色を十にして、五
包には、上に銘を書き、五包には、かくして中に
書くなり。五包の試みを出し候時、書き付けのごと
く「これは我庵(は)」、「これは都のたつみ」、「これはしか
ぞすむ」、「これは世をうぢ山と」、「これは人はいふ
なり」と五包ながら名乗りて出し候なり。さて、試み過ぎ
て五包の香のうち何れなりとも一炷つぎ
出し候時、「我庵は」となりとも、「都のたつみ」と
なりとも、心次第に札紙のおく(奥)に書き付け、上
に我が「名乗り」を書きて出し、硯箱のふた(蓋)に入れ



置くなり。面々札紙そろいて後、札紙を開き、記録紙にうつして、その後、かの一包をひらき、その一句を記録のはしに書き付け、当りたるに点をかけ候なり。所望なれば、また一炷聞き候事も有るなり。

○小鳥香之記

ももちどり

ほととぎす

いしたたき

あおしとど

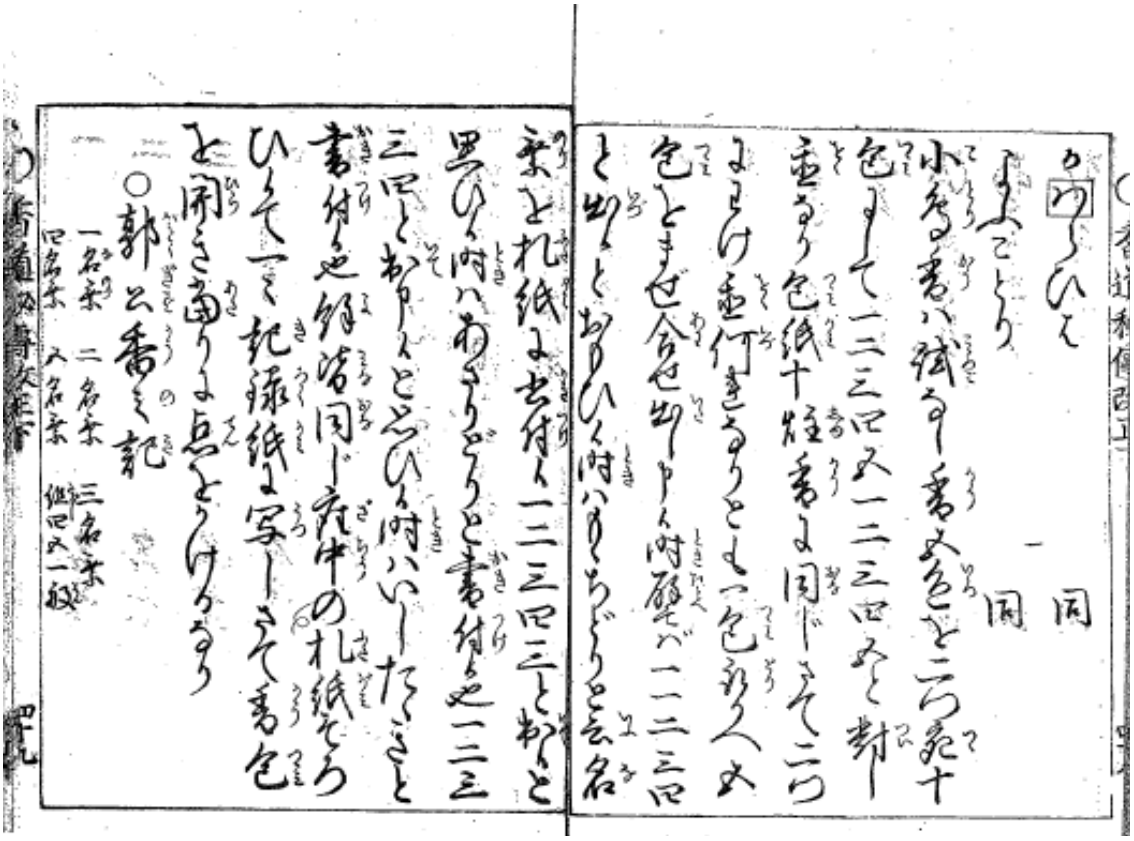
きせきれい

くろつぐみ

ひとめどり

あさりどり

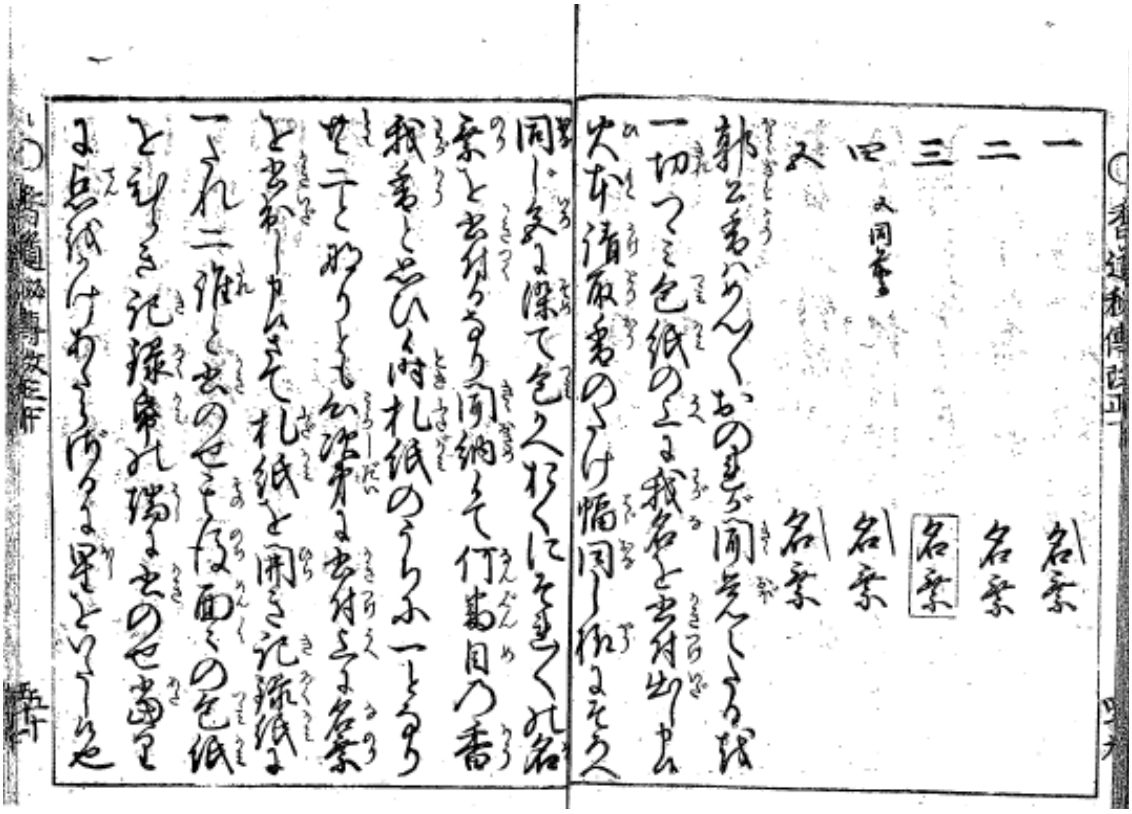
かしらだか



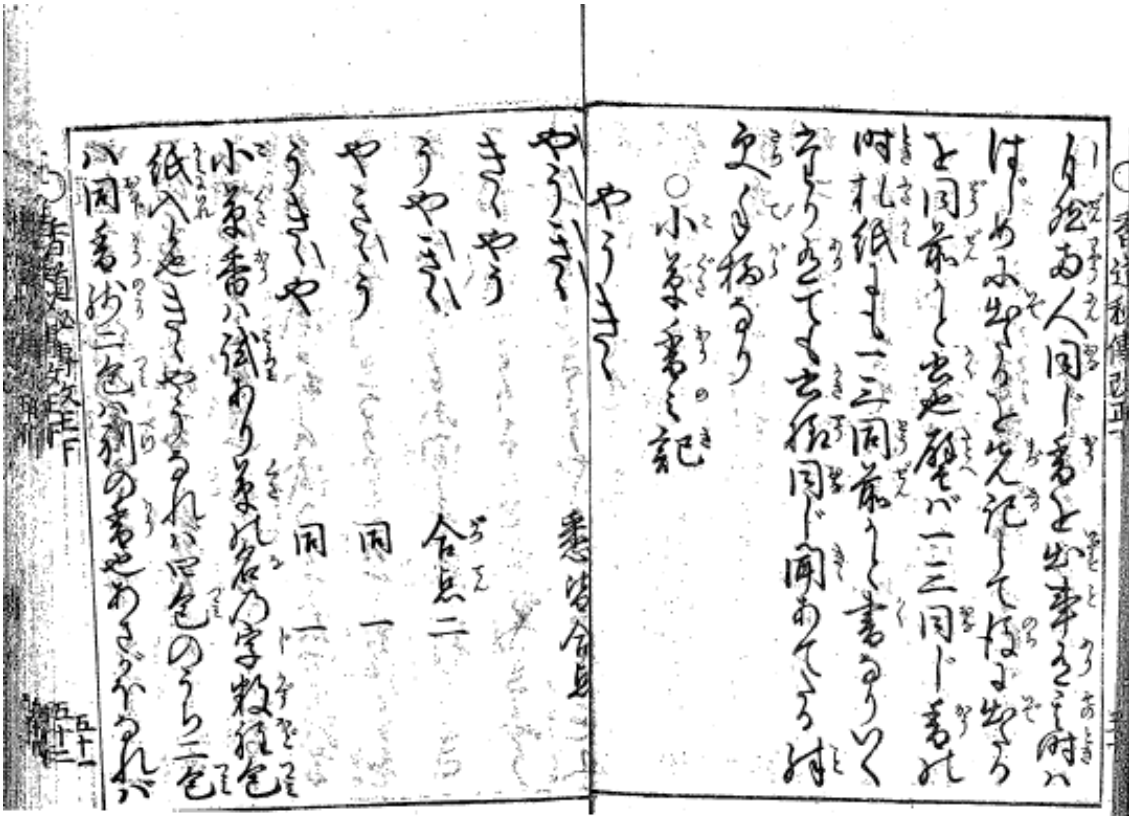
かわらひわ
よぶこどり

「小鳥香」は試みなし。香五色を二つずつ、十包にして「一、二、三、四、五」、「一、二、三、四、五」と対し置くなり。包紙、十炷香に同じ。さて、二つにわけ置く何れなりとも一包取りかえ、五包をまぜ合わせ出し申し候時、たとえば「一、一、二、三、四」と出候とおもい候時は、「ももちどり」と云う名乗りを札紙に書き付け候、「一、二、三、四、三」と出候と思い候時は、「あさりどり」と書き付け候なり。「一、二、三、三、四」と出申し候と思い候時は、「いしたたき」と書き付け候なり。餘、皆同じ。座中の札紙そろい候て、一々記録紙に写し、さて、香包を開き、当りに点をかけるなり。

○郭公香之記



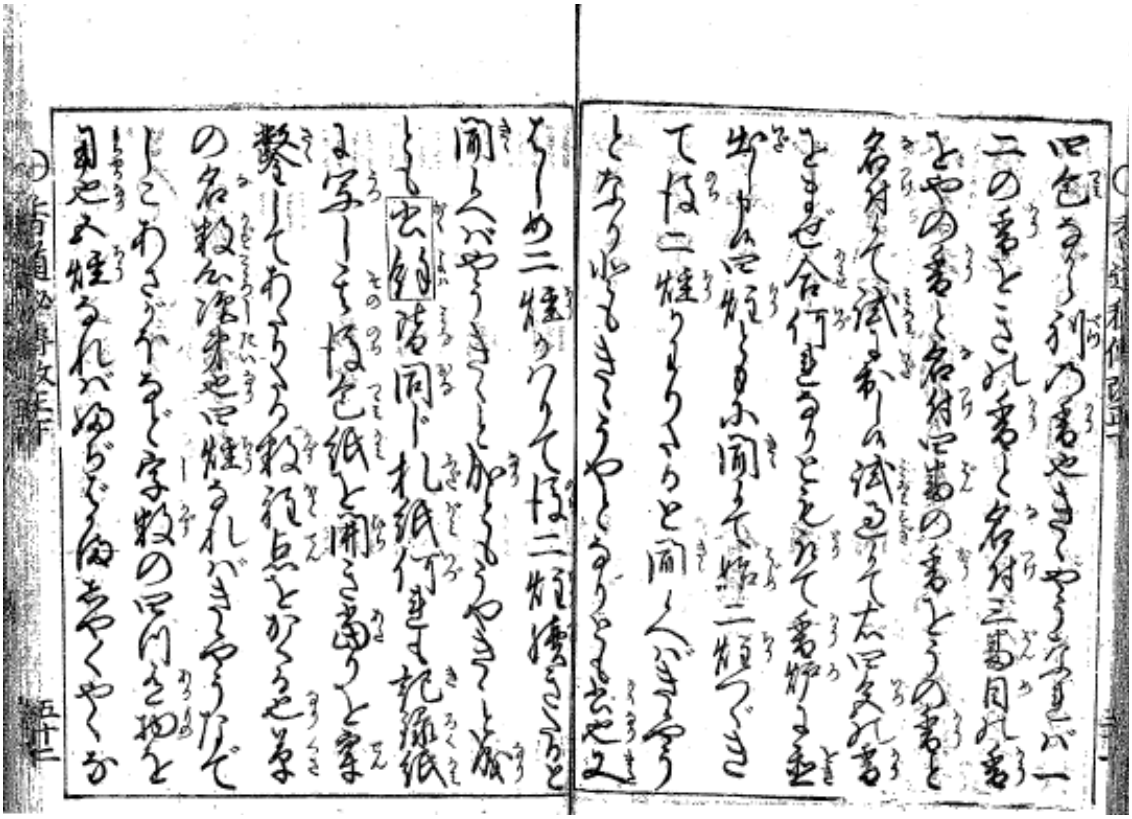
「郭公香」は、めんめん（面々→連衆）のおのれが聞き覚えたるを一切れ包み、包紙の上に「我が名」を書き付け出し申し候。火本請け取り、香のたけ（丈）幅同じ様にそろえ、同じ色に染めて包みかえ、おく（奥）にそれぞれの「名乗り」を書き付くるなり。聞き納め候て、「何番目の香、我が香」と思い候時、札紙のうちに「一」となりとも、「二」となりとも心次第に書き付け、上に名乗りを書き出し申し候。さて、札紙を開き、記録紙に「一　だれ」「二　誰」と書きのせ、その後、面々の包紙をひらき、記録紙の端に書きのせ、当りに点をかけ、当らざるに星をいたし候なり。



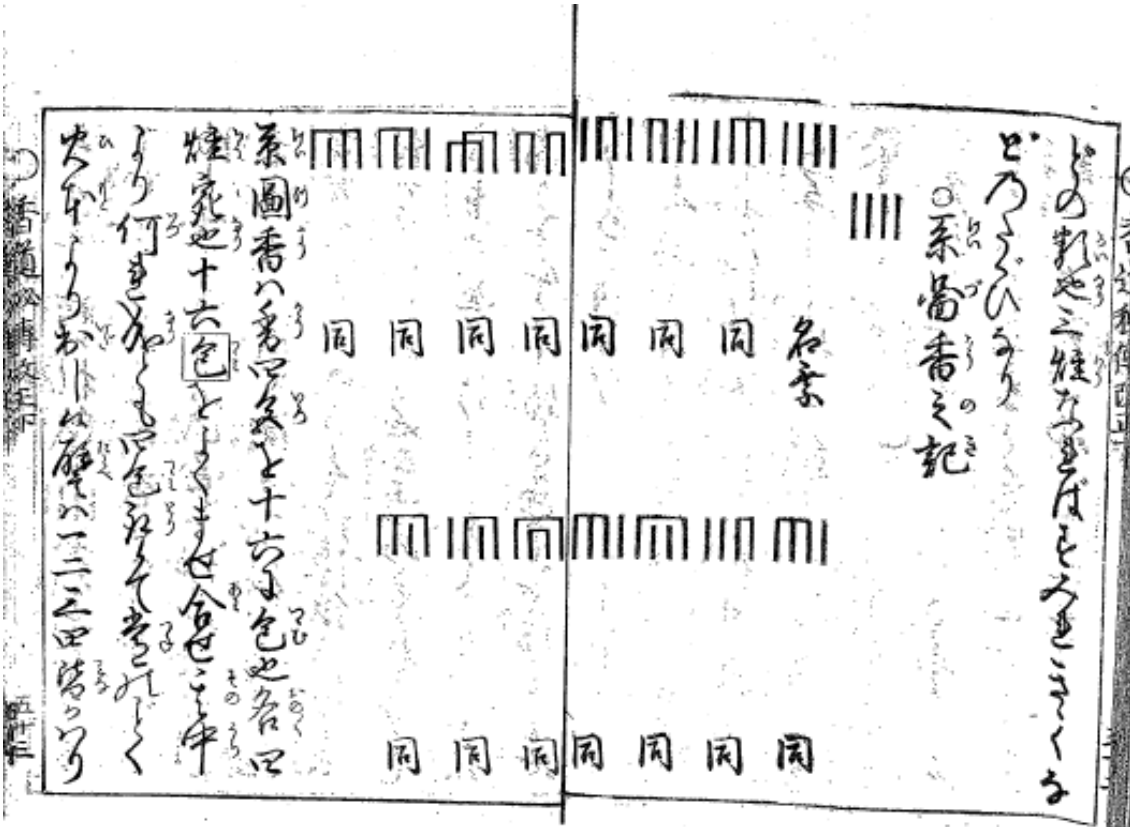
自然、両人同じ香を出す事あり。その時は、はじめに出たるを先ず記して、後に出たるを「同前か」と書くなり。たとえば「一、三」同じ香の時、札紙にも「一、三　同前か」と書くなり。いくたり（幾人）有りても書き様同じ。聞き当てたる殊更（ことさら）手柄なり。

○小草香之記

「小草香」は試みあり。「草の名」の字数程、包紙入れ候なり。「ききやう（桔梗）」なれば四包のうち二包は同じ香、残り二包は別の香なり。「あさかほ（朝顔）」なれば



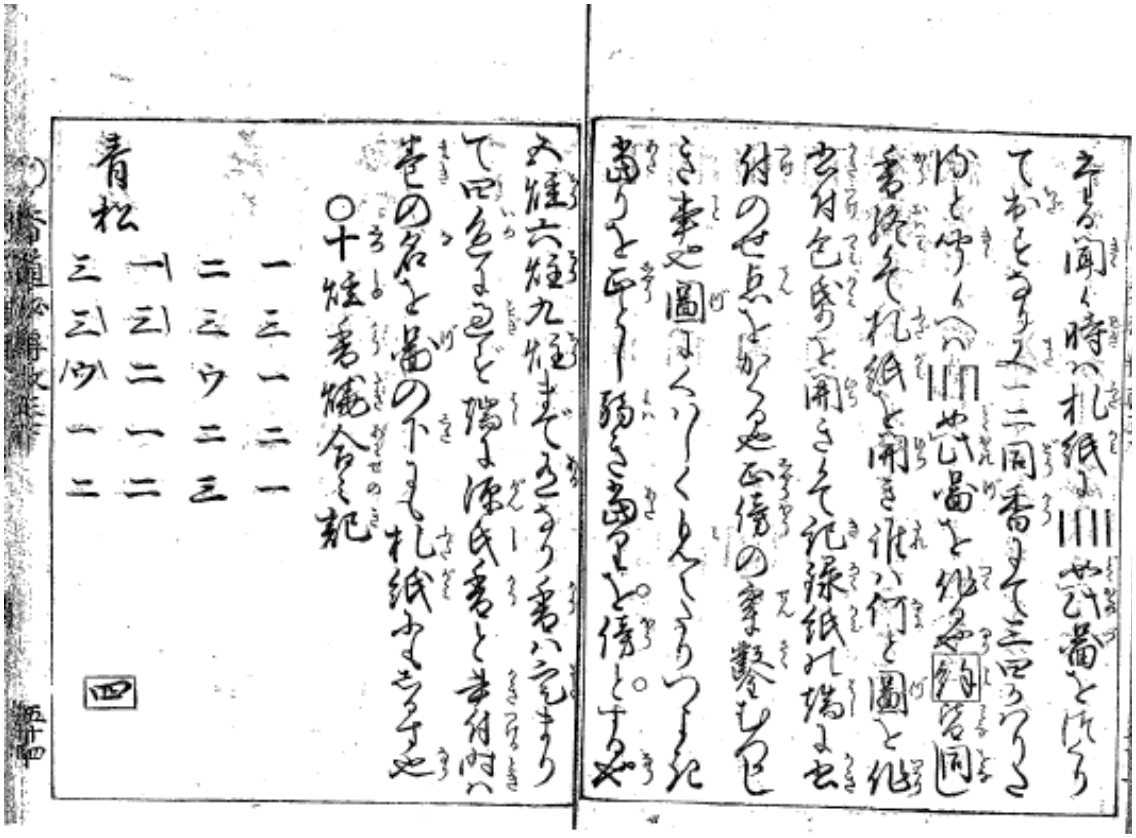
四包ながら、別の香なり。「ききやう」なれば、一、二の香を「き」の香と名付け、三番目の香を「や」の香と名付け、四番（目）の香を「う」の香と名付け候て試みに出し候。試み過ぎて、右四色の香をまぜ合わせ、何れなりとも取りて、香炉に置き出し申し候。四炷ともに聞き候て、始め二炷つづき（続）て後、二炷かわりたると聞き候えば、「ききやう」となりとも「ききうや」なりとも書くなり。また、はじめ二炷かわりて、後二炷続きたると聞き候えば、「やうきき」となりとも、「うやきき」となりとも書く。餘は、皆同じ。札紙、何れも記録紙に写し、その後、包紙を開き、当りを穿鑿（せんさく）して、あたりたる数程、点をかくるなり。草の名数、心次第なり。四炷なれば「ききやう」「なでしこ」「あさがほ」など字数の四つ在る物を用ゆるなり。五炷なれば「ふじばかま」「しゃくやく」な



どの類なり。三炷なれば「すみれ」「きぎく」などのたぐいなり。

○系図香之記

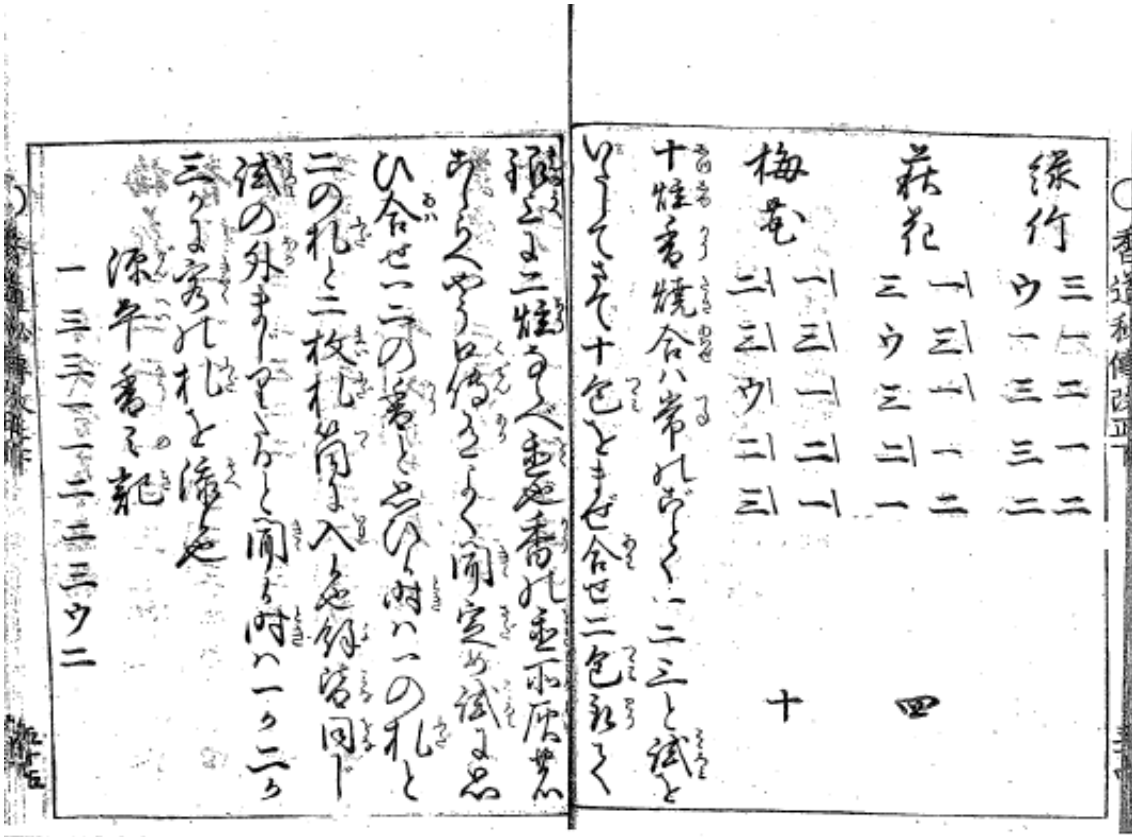
「系図香」は四色を十六に包むなり。各々四炷ずつなり。十六包をよくまぜ合わせ、その中（うち）より何れなりとも四包取りて、常のごとく火本より出し候。たとえば「一、二、三、四」皆かわり



たる聞き候時は、札紙に「|||」かくのごとく図を作りて出すなり。また、「一、二」同香にて「三」、「四」かわりたると聞き候えば「||||」かくのごとく図を作るなり。餘、皆同じ。香終りて札紙を開き、「誰は何」と図を作り、書き付け、包紙を開き候て、記録紙の端に書き付けのせ、点をかくるなり。「正傍」の穿鑿(せんさく)むつかしき事なり。図にくわしく見えたり。つよき当りを「正」とし、弱き当りを「傍」とするなり。

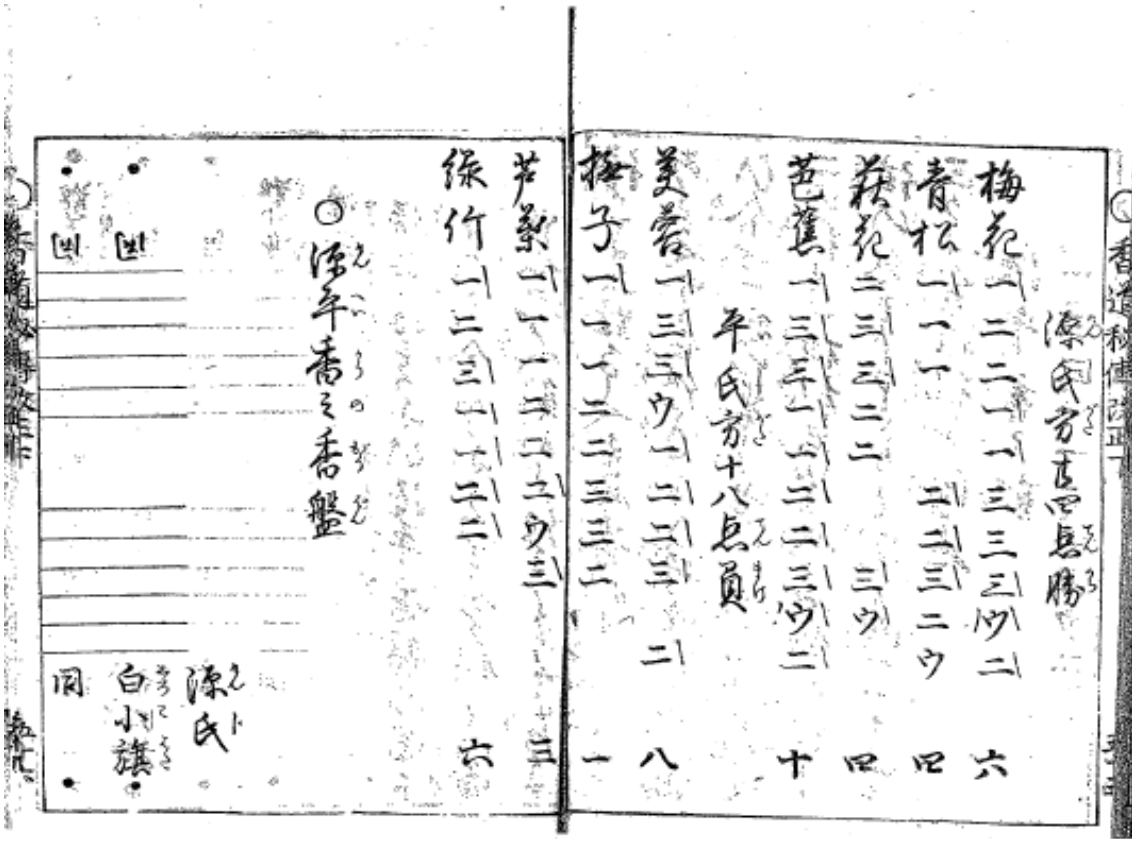
五炷、六炷、九炷まで在るなり。香は定まりて四色に過ぎず。端に「源氏香」と書き付ける時は、巻の名を図の下にも札紙にもしるすなり。

○十炷香焼合之記



十炷香焼合は常のごとく「一、二、三」と試みをいたして、さて、十包をまぜ合わせ、二包取りて、銀上に二炷ならべ置くなり。香の置き所、灰のこしらえよう口伝在り。よく聞き定め、試みに思い合わせ「一、二の香」と思い候時は、「一」の札と「二」の札と二枚、札筒に入れ候なり。餘、皆同じ。試みの外まじりたると聞き候時は、「一」か「二」か「三」かに「客」の札を添え候なり。

○源平香之記



源氏方五点長勝

梅花 一二二一一三三三ウ二 六
青松 一一一 二二三二ウ 四
萩花 二三三二二 三ウ 四
芭蕉 一三三一一二二三ウ二 十

平氏方十八点負

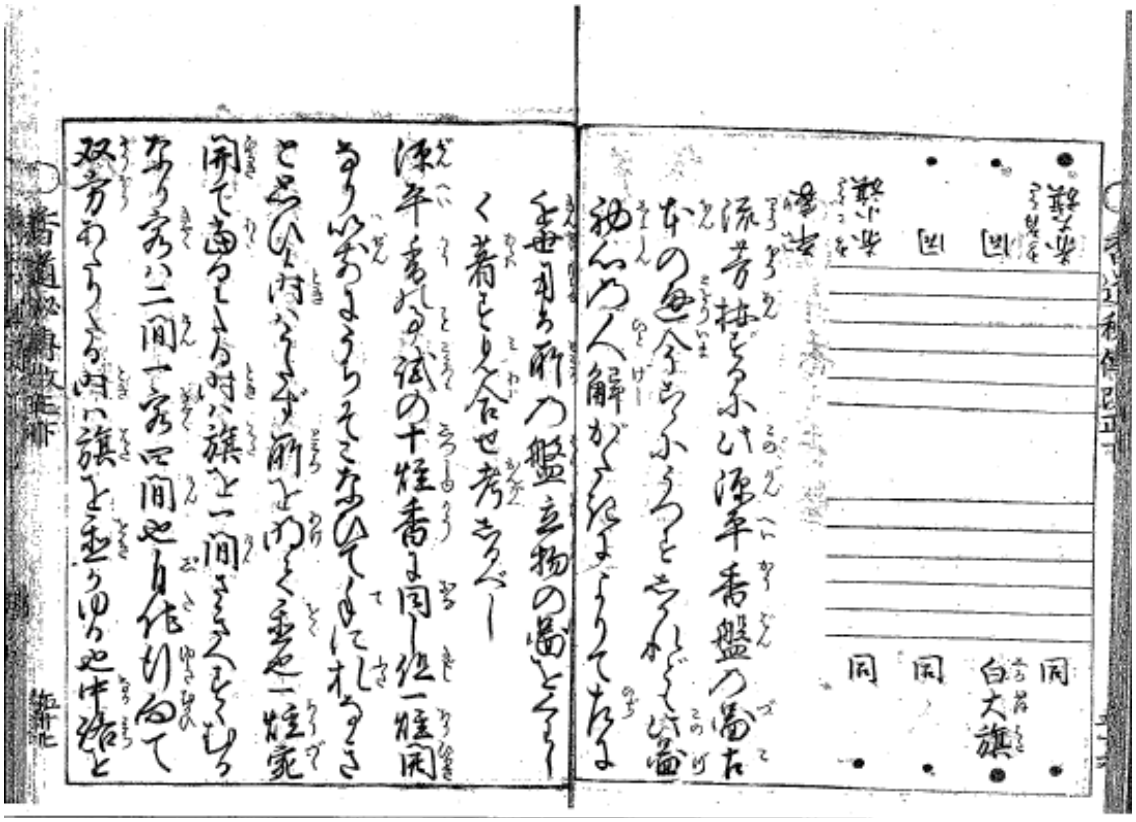
美容 一三三ウ一二二三 二 八
梅子 一一一二二三三二 一
芦葉 一一一二二二ウ三 三
保竹 一二三一一二二 六

○源平香之香盤

源氏
白小旗
同

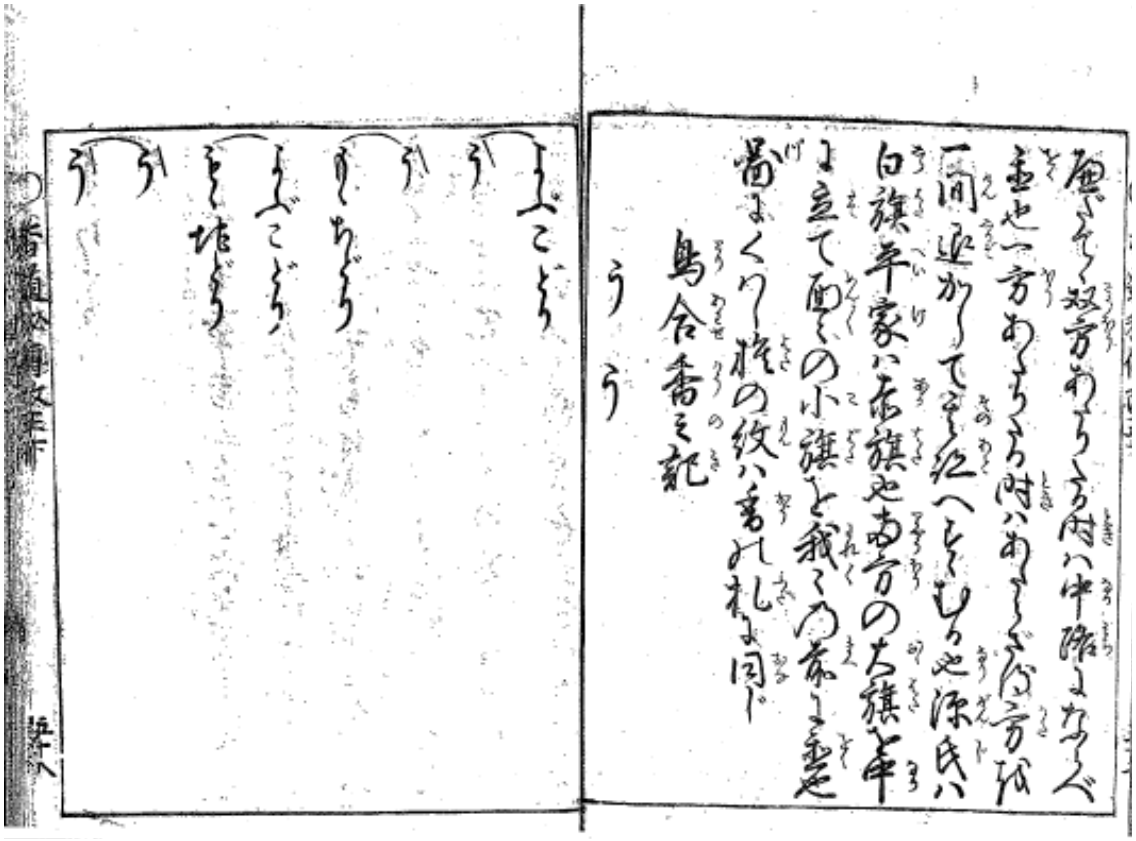
同 同

○源平香之香盤



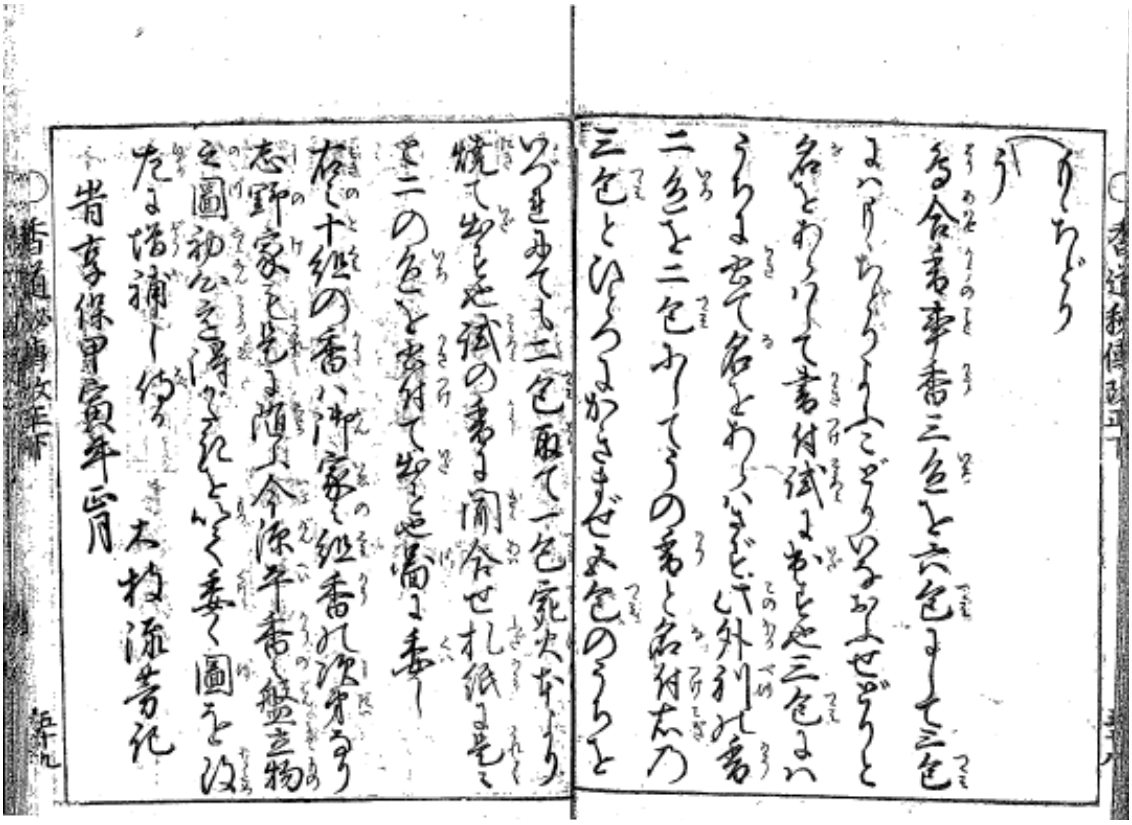
流芳按ずるに、この源平香盤の図、古
本の通り、今ここにうつす。しかれども、この図、
初心の人、解しがたきによりて、左に(後段)
近世用ゆる所の盤立物の図をくわし
く著す。見合わせ考えしるべし。

「源平香」の事、試みの十炷香に同じ。但し「一炷開き」
なり。以前にうち(打)そこないて、手に札なき
と思い候時はうたず、所を明けて置くなり。一炷ずつ
開きて、当りたる時は、「旗」を一間さきへすすむる
なり。「客」は二間、一客四間なり。自他行き向かいて、
双方あたりたる時は、旗を置きかゆる(替)なり。中路を



へだてて双方あたりたる時は、中路にならべ置くなり。一方あたりたる時は、あたらざる方を一間退かして、その後へすすむるなり。「源氏」は「白旗」、「平家」は「赤旗」なり。両方の「大旗」を中に立て、面々の「小旗」を我々の前に置くなり。図にくわし。旗の紋は香の札に同じ。

○鳥合香之記



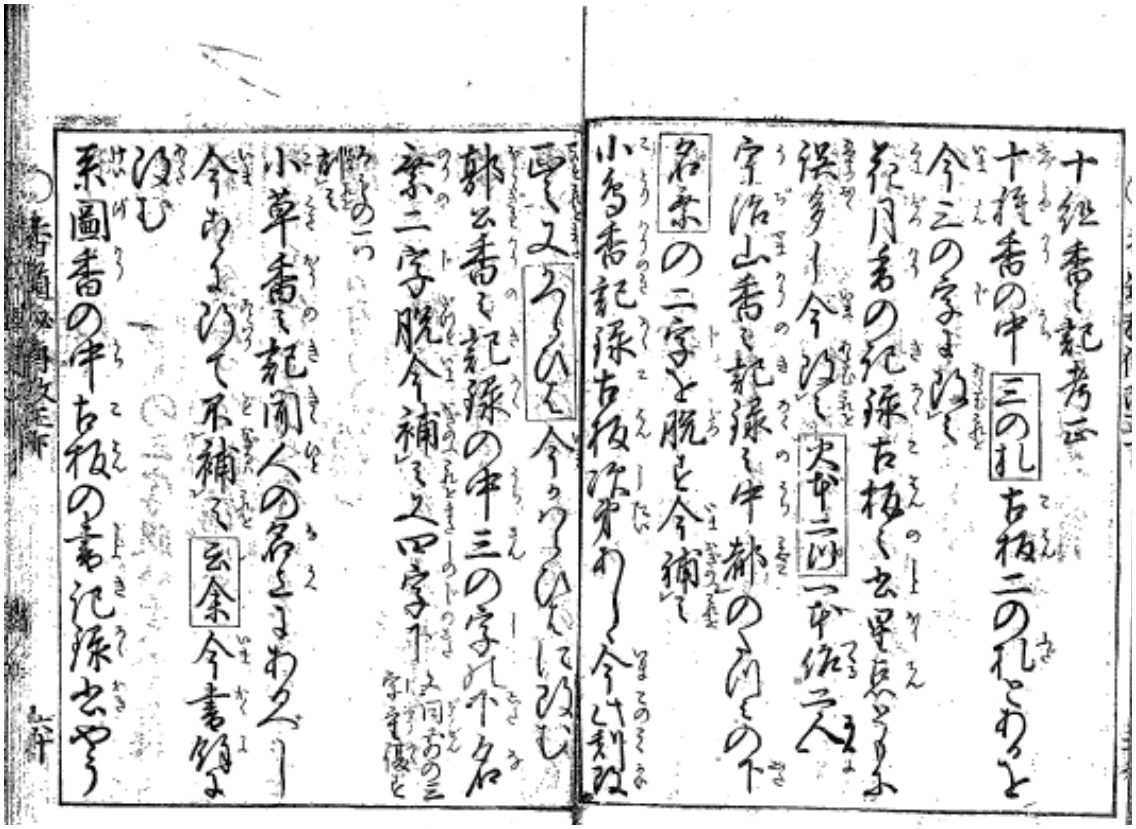
「鳥合香」の事、香三色を六包にして、三包
には「ももちどり」「よぶこどり」「いなおふせどり」と
名をあらわして書き付け、試みに出すなり。三包には
うちに書きて名をあらわさず。この外、別の香
二色を二包にして「う」の香と名付け、右の
三包とひとつにかきまぜ、五包のうちを

いずれにても二包取りて、一包ずつ、火本より
焼て出すなり。試みの香に聞き合わせ、札紙に「これこれ」
と二の色を書き付けて出すなり。図に委し。

右の十組の香は、御家の組香の次第なり。
志野家もこれに随う。今、源平香の盤立物
の図、初心、意(こころ)得がたきを以って、委しく図を改め、
左に増補し侍る。

大枝流芳記

皆享保甲寅年正月



十組香之記考正

「十種香」の中三の札、古板「二の札」とあるを、今、「三」の字にこれを改む。

「花月香」の記録、古板の書、星点ともに誤り多し。今、これを改む。火本二つ　一本、「二人」に作る。

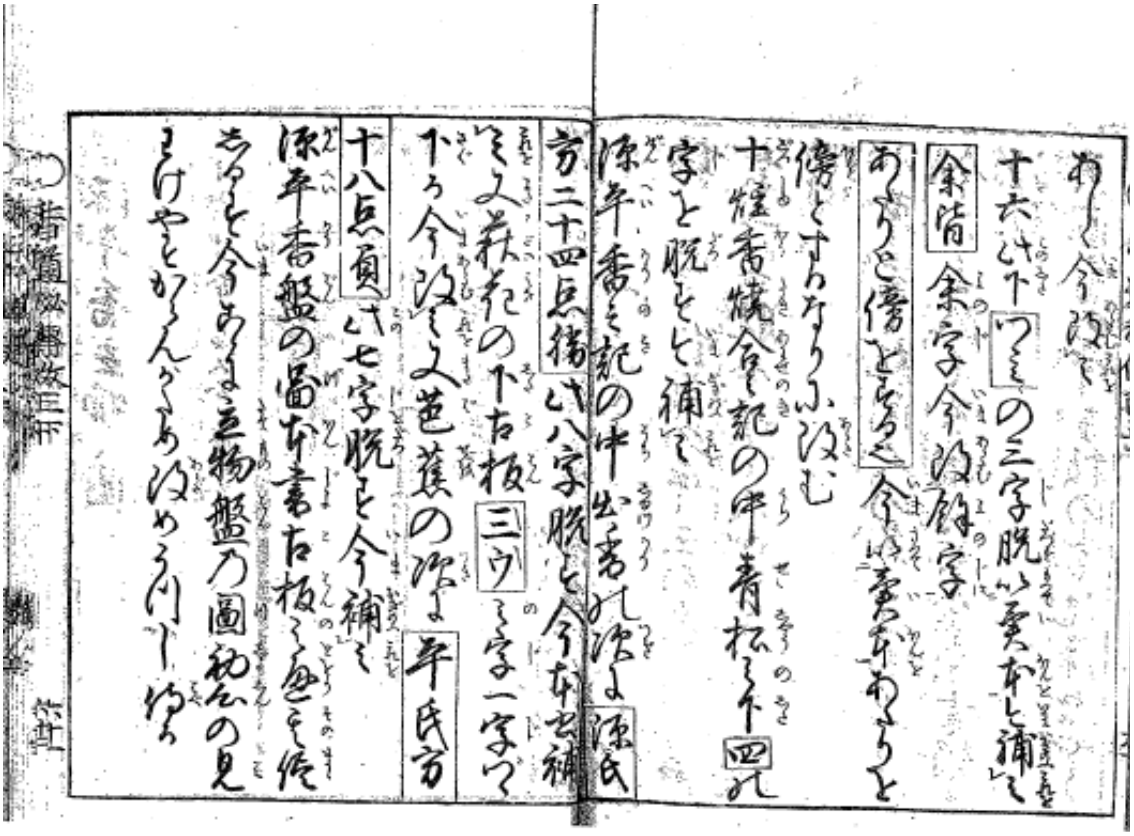
「宇治山」香の記録の中、「都のたつみ」の下、名乗の二字を脱す。今、これを補う。

「小鳥香」の記録、古板次第あしく、今、この刻これを改正す。また、かつらひは、今「かはらひは（河原鶸）」に改む。

「郭公香」の記録の中、「三」の字の下、「名乗」二字脱す。今これを補う。また、「四」の字の下、（「五　同前」の三字重複するもの一つこれを削る。）

「小草香之記」、聞き人の名、上にあるべし。今、ここに断りて、これを補わず。云余、今「書く。餘」に改む。

「系図香」の中、古板の書、記録書きよう



あしく、今、これを改む。

十六この下、つつみの三字脱す。異本を以って、今これを補う。

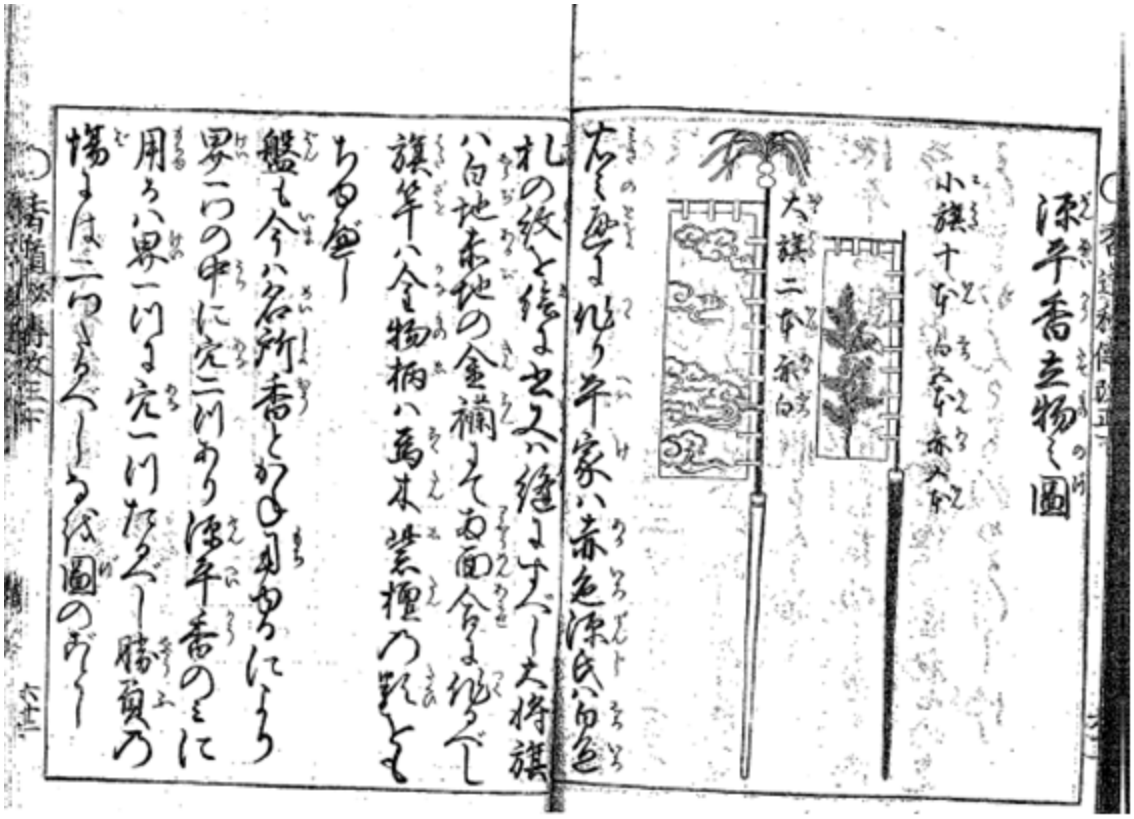
余皆、余の字、今「餘」の字に改む。

あたりと傍とするなり　今、異本を以って「あたりを傍とするなり」に改む。

「十炷香焼合之記」の中、「青松」の下、四の字を脱す。今これを補う。

「源平香之記」の中、出香の次に源氏方二十四点勝、この八字脱す。今、本書これを補う。また、「萩花」の下、古板三、ウの字、一字ずつ下がる。今、これを改む。また、「芭蕉」の次に平氏方十八点負、この七字脱す。今、これを補う。

「源平香盤の図」、本書古板の通り、その儘（まま）しるす。今ここに立物、盤の図、初心の見わけやすからんがため、改めうつし侍る。



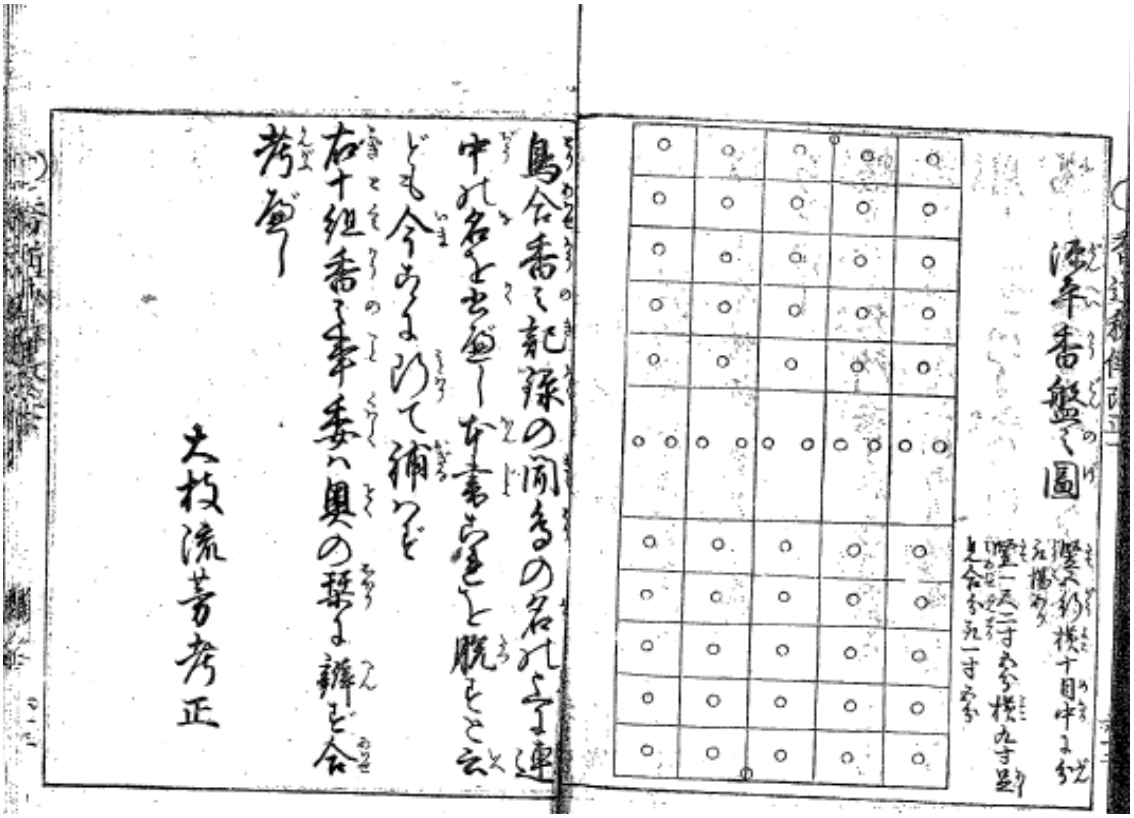
源平香立物之図

「小旗」十本　白五本、赤五本

「大旗」二本　赤、白

右の通りに作り、「平家」は赤色、「源氏」は白色、札の紋を絵に書き、または縫（ぬい）にすべし。「大将旗」は白地、赤字の金襴にて両面合せに作るべし。旗竿は金物、柄は烏木（こくたん）、紫檀の類いをもちゆべし。

「盤」も今は、「名所香」とかね（兼ね）用ゆるにより、界（けい）一つの中に穴二つあり。「源平香」のみに用ゆるは、界一つに穴一つたるべし。「勝負の場」は二つたるべし。なお、図のごとし。


源平香盤之図
鳥合香之記録の聞書の名の上に連
中の名を書くべし本書これを脱すと云
ども今ここに断りて補わず
右十組香の事委しくは奥の栞に辨ず合
考べし
大枝流芳考正

［源平香盤之図］

竪五行、横十目、中に「分取場（ぶんどりば）」あり。
竪一尺二寸五分、横九寸、足見合わせ、分取り一寸五分

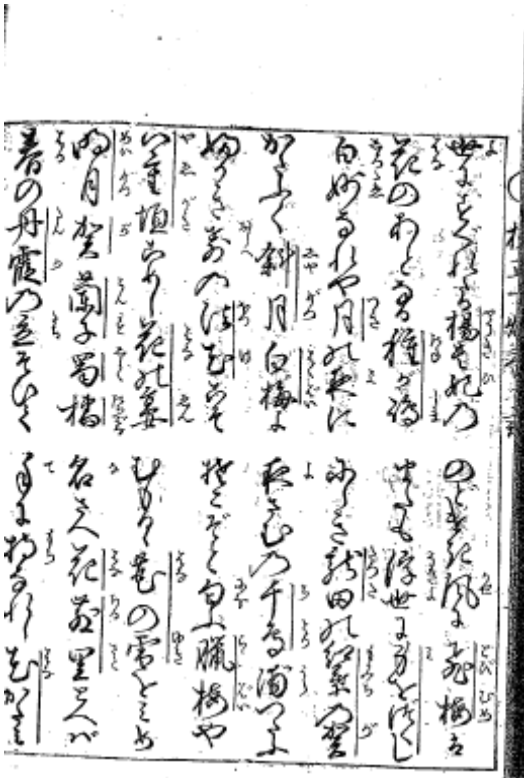
「鳥合香」の記録の聞き、鳥の名の上に連
中の名を書くべし。本書これを脱すと云え
ども、今ここに断りて補わず。

右十組香の事、委しくは『奥の栞』に弁ず。合わせ
考うべし。

大枝流芳考正

名香六十一種名寄文字くさり（鎖）

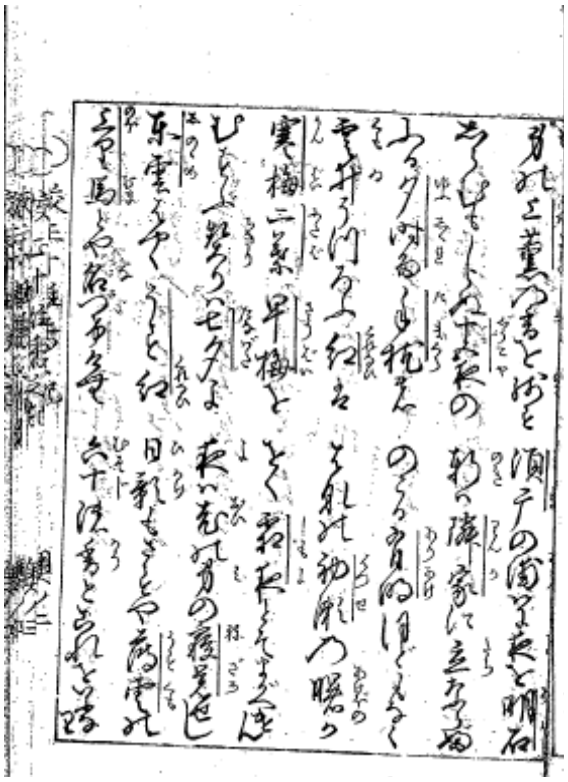
夫れ、名香のかずがすに、
にほひ上なき蘭奢待（らんじゃたい）、
いかにおとらん法隆寺（ほうりゅうじ）、
逍遥（しょうよう）、三吉野（みよしの）、紅塵（こうじん）や、
やどの古木（こぼく）の春の花、
ながれたえせぬ中川（なががわ）と、
とくに妙なる法花経（ほけきょう）は、
花たちばな（はなたちばな）の香ぞふかみ、
みかはにかくる八橋（やつはし）の、
法のはやしの園城寺（おんじょうじ）、
しかはた似（にたり）うらみそふ、
ふじの煙（ふじのけむり）の絶えやらじ、
しげる菖蒲（あやめ）にふく軒ば、
般若（はんにゃ）、鷓胡斑（しゃこばん）、青梅（せいばい）よ、



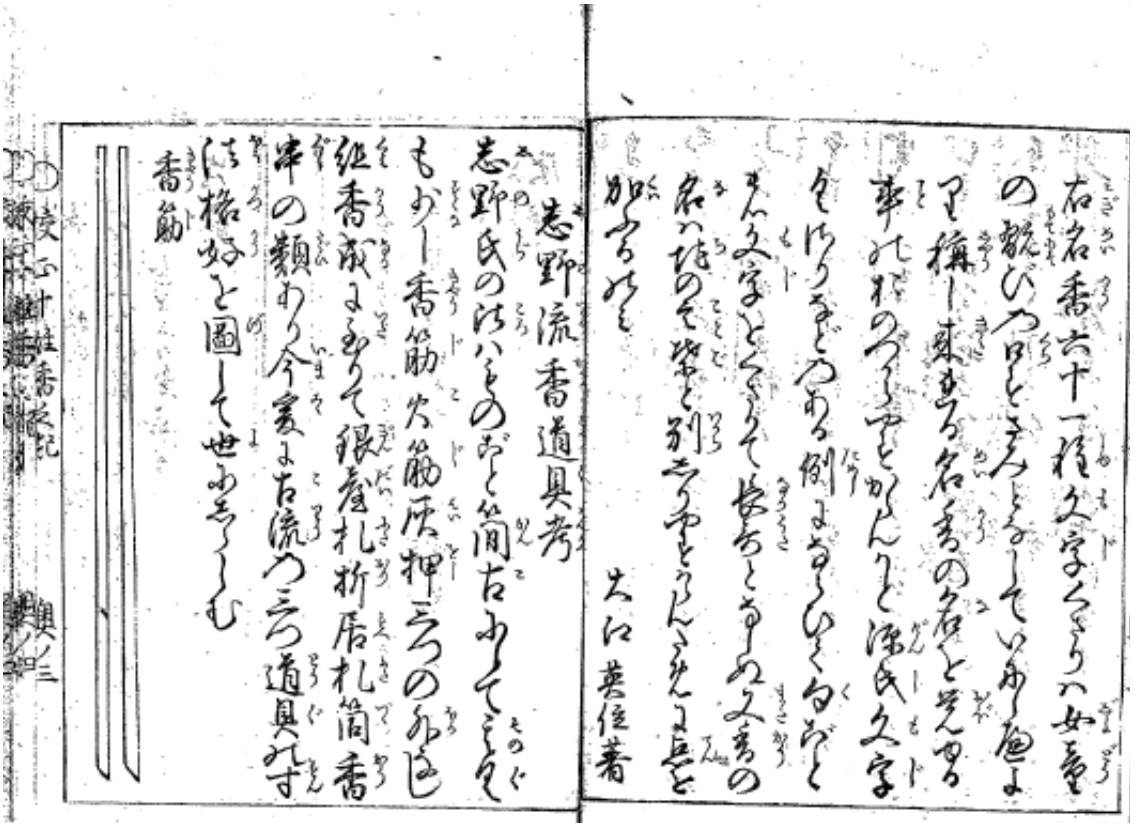
［見開きを分割］

世にすぐれたる楊貴妃（ようきひ）の、
のどけき風に飛梅（とびうめ）は、
花のあとなる種が嶋（たねがしま）、
またも浮き世に身をづくし（澪標）、
白妙なれや月（つき）の夜に、
にしき龍田（たつた）の紅葉の賀（もみじのが）、
かたぶく斜月（しゃげつ）、白梅（はくばい）よ、
夜さむの千鳥（ちどり）浦つたふ、
ふかき教えの法花（ほっけ）こそ、
そこぞと匂う鑞梅（ろうばい）や、
八重垣（やえがき）こめし花の宴（はなのえん）、
むもるる花の雪（はなのゆき）をみめ、
名月（めいげつ）、賀（が）、蘭子（らんす）、蜀（しょく）、橘（たちばな）、
名さへ花散里（はなちるさと）とへば、
春の丹霞（たんか）のたちそひて、
手に持ちなれし花かたみ（はながたみ）、

［見開きを分割］



身の上薫（うわだき）の香を残す、
須磨（すま）の浦はに夜を明石（あかし）、
しらむもしらぬ十五夜（じゅうごや）の、
軒は隣家（りんか）に立ちならぶ、
ふる夕時雨（ゆうしぐれ）、手枕（たまくら）の、
のこる有明（ありあけ）ほどもなく、
雲井（くもい）うつろふ紅（くれない）は、
はなの初瀬（はつせ）の曙か、
寒梅（かんばい）、二葉（ふたば）、早梅（そうばい）を、
をく霜夜（しもよ）とぞまがえけん、
むすぶ契りは七夕（たなばた）よ、
夜は老の身の寝覚（ねざめ）せし、
東雲（しののめ）はやくうす紅（うすくれない）、
日影もさすや薄雲（うすぐも）の、
上り馬（のぼりうま）とや名づけけん、
六十の香とこれをいふなり。



右名香六十一種文字くさりは女童
の翫びのロずさみとなして、いにしえよ
り称し来たれる名香の名を覚ゆる
事のおのずからやすからんかと、「源氏文字
くさり」などのある例にならいて、句ごと
の文字をくさりて長歌となしぬ。また、香の
名は、地の言葉と別ち、しりやすからんために点を
加うるのみ。

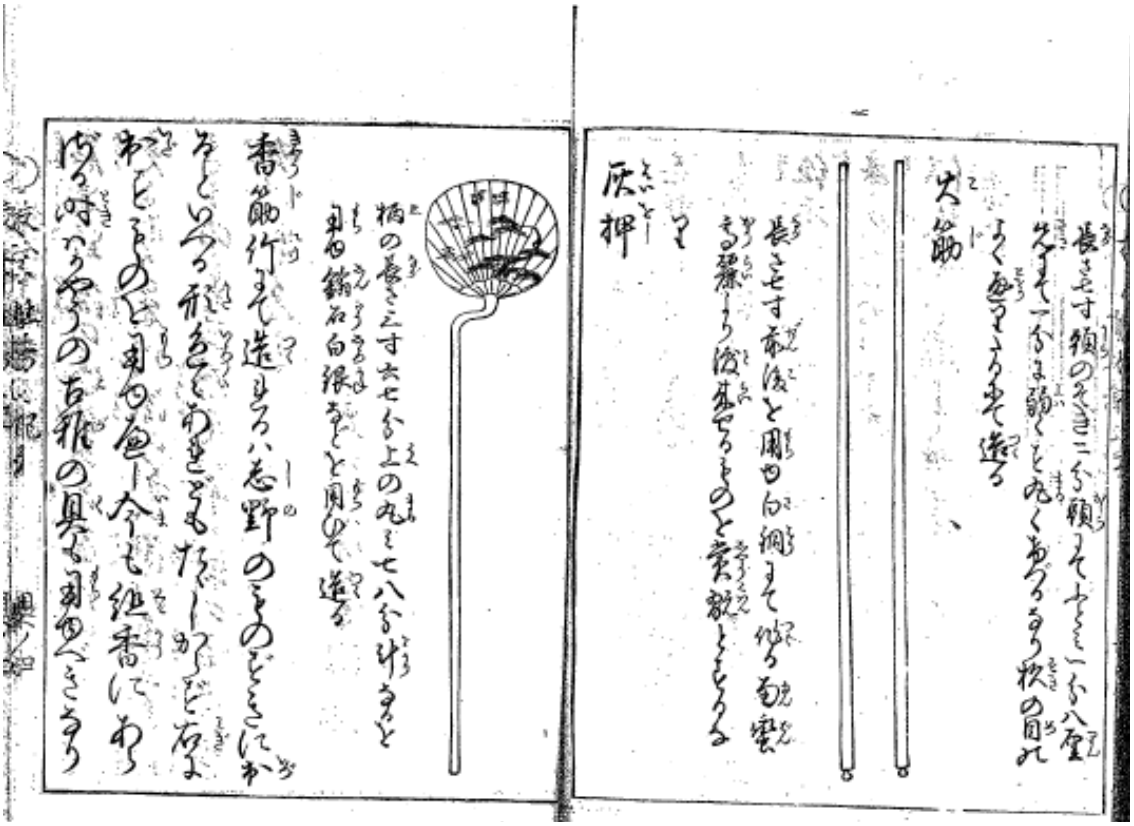
大江英信著

志野流香道具考

志野氏の頃は、ものごと簡古にして、その具
も少なし。「香筋」、「火筋」、「灰押」、三つの外なし。
組香成るに至りて、「銀臺」、「札」、「折居」、「札筒」、「香
串」の類あり。今、ここに古流の三つ道具の寸
法、格好を図して世にしらしむ。

香筋（きょうじ）

［図］



長さ七寸、頭のぞき二分、頭にてふとみ(太)一分八厘先にて一分に弱くす。丸くけずるなり。杉(杉)の目のよく通りたるにて造る。

火筋(こじ)

［図］

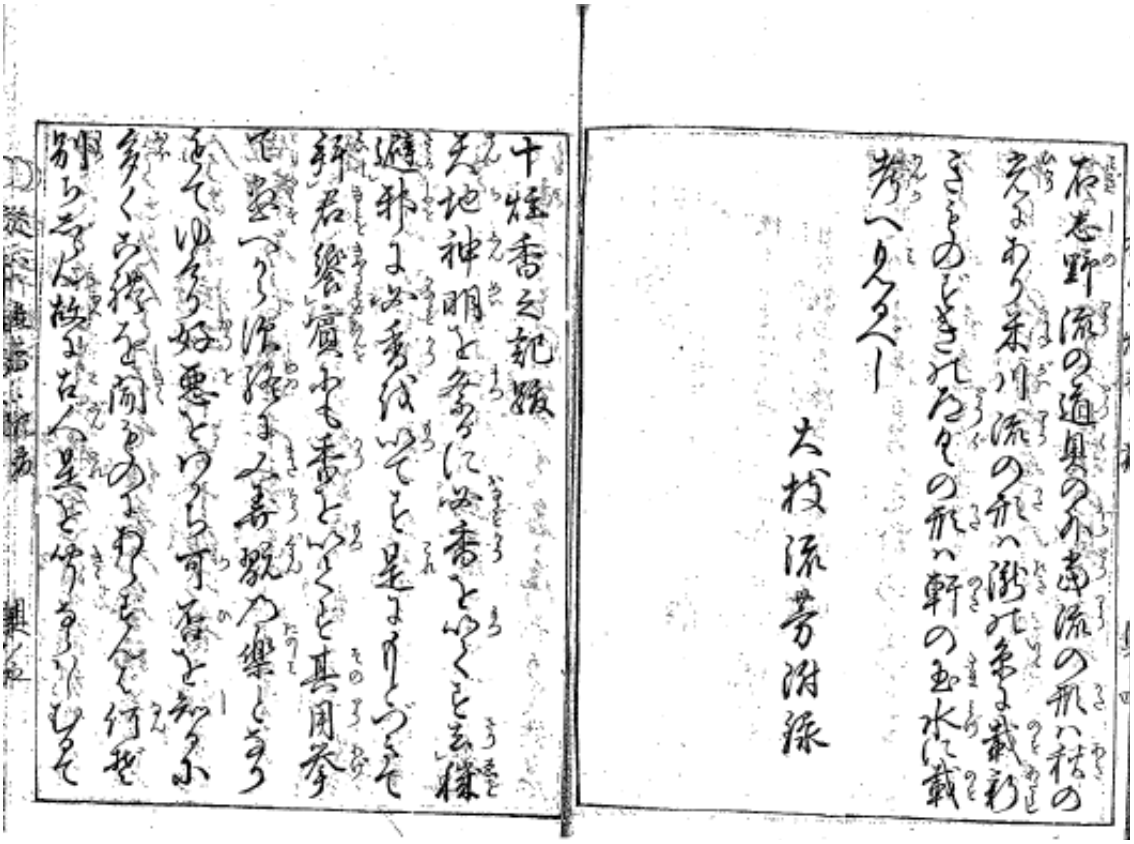
長さ七寸前後を用ゆ。白銅(さはり)にて作る。南蛮高麗より渡来せるものを賞玩とするなり。

灰押(はいおし)

［図］

柄の長さ三寸六、七分。上の丸み七、八分ばかりなるを用ゆ。鍮石(しんちゅう)、白銀(しらがね)などを用いて造る。

香筋、竹にて造れるは、志野のものずきに出るといえる。形色々あれども、ただしからず。右に出すものを用ゆべし。今も組香にあらざる時は、かようの古雅の道具も用ゆべきなり。

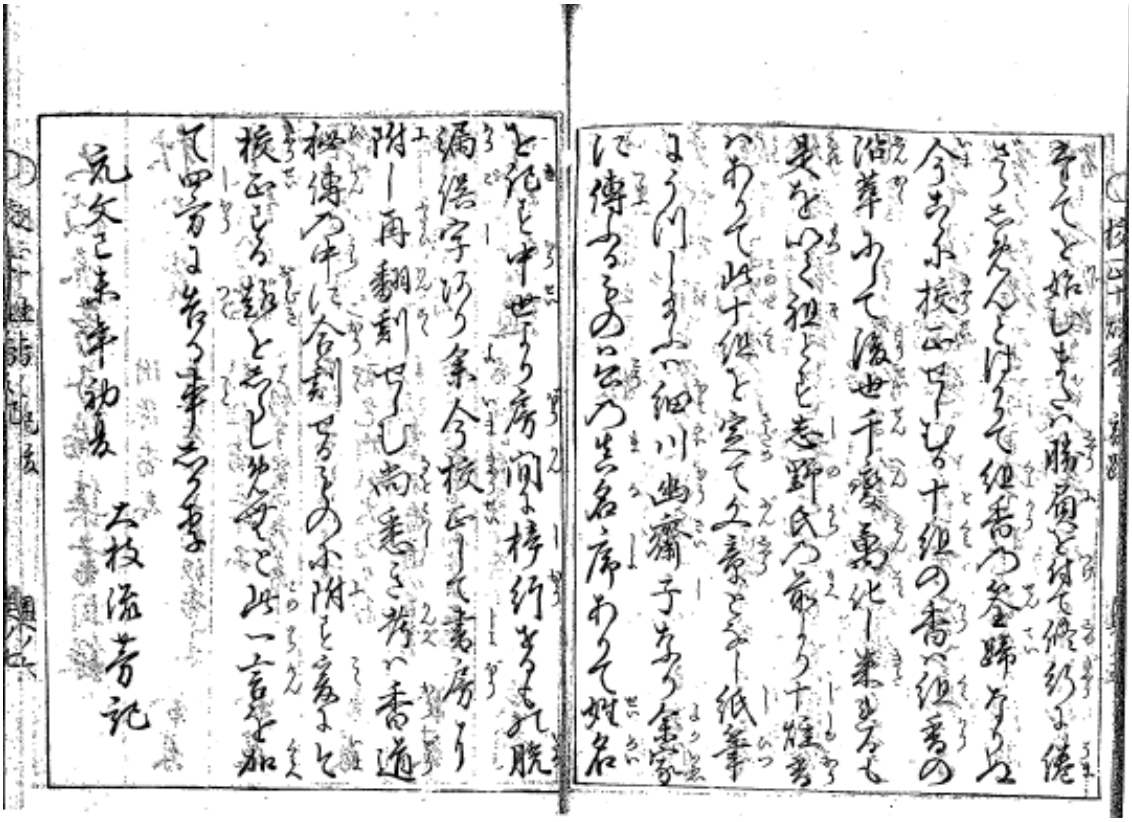


右、志野流の道具の外、当流の形は『秋の光』にあり。米川流の形は『瀧の糸』に載す。新しきものずきの道具の形は『軒の玉水』に載す。考え見るべし。

大枝流芳附録

十炷香之記跋

天地神明を祭るに必ず香を以ってす。穢(え)を去り、邪を避くるに必ず香を以ってす。これにもとづきて、君を拝し、賓を饗するにも香を以ってす。その用、挙げて尽くすべからず。終にまた弄翫(ろうがん)の楽しみとなりもてゆけり。好悪(こうお)をわかち、可否を知るに、多くこれを聞くものにあらずんば、何ぞ別ちしらん。故に古人、これを聞きならわしむるて

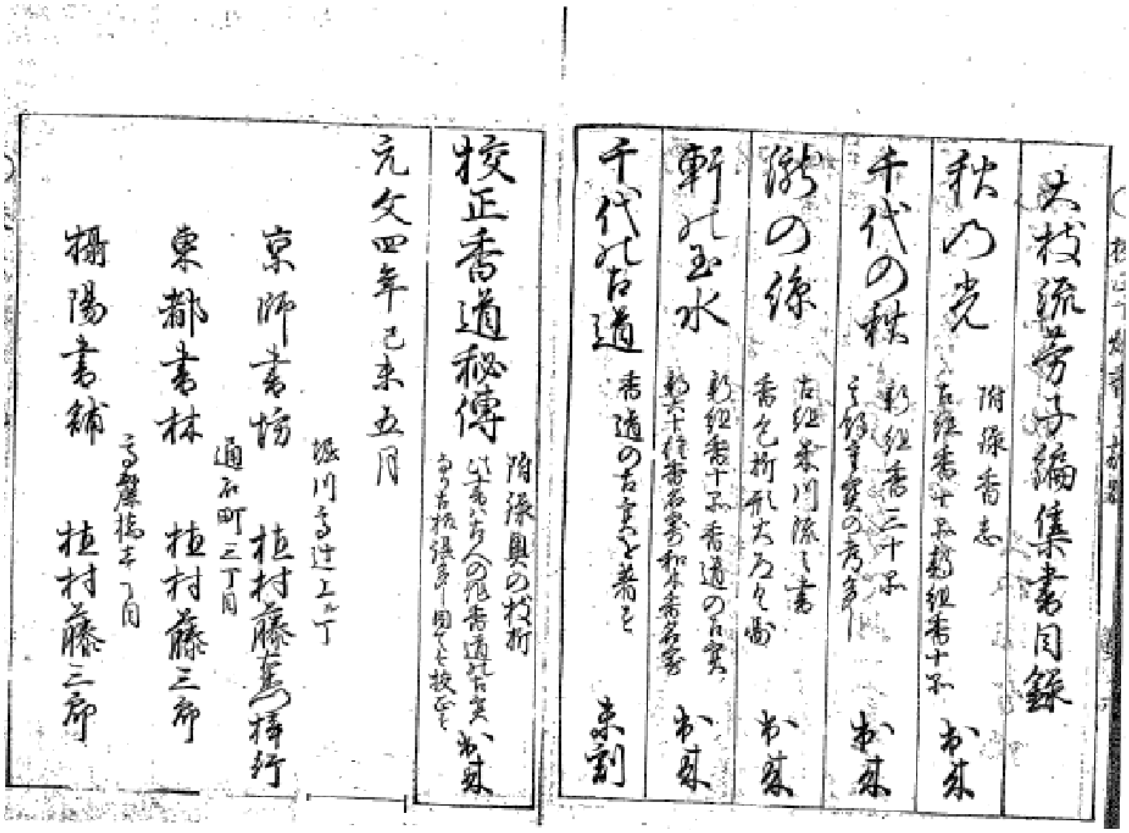


だてを始む。または、勝負を付けて修行に倦（うま）
ざらしめんとはかりて、組香の筌蹄（せんてい）なりぬ。
今ここに校正せしむる十組の香は、組香の
沿革にして、後世、千変萬化し来たれるも、
これを以って祖とす。志野氏の前より「十炷香」
はありて、この十組を定めて文章となし、紙筆
にうつし給うは、細川幽齋子なり。余が家
に伝うるものは、公の真名序ありて姓名

を記す。中世より房間（ぼうかん）に梓行（しこう）するもの脱
漏、誤字あり。余、今、校正して書房に
附し、再翻刻せしむ。尚、悉（くわ）しき考えは、「香道
秘傳」の中に合刻せるものに附す。ここに今、
校正する趣をしらしめんと、この一言を加え
て四方に告ぐる事しかり。

元文乙未年初夏

大枝流芳記



大枝流芳子編集書目録

秋乃光　附録　香志
古組香十品　新組香十品　出来
千代の秋　新組香三十品
その餘重宝の考多し　出来
瀧の絲　古組米川流之書
香包折形　火道具図　出来
軒の玉水　新組香十品　香道の古実
新六十種香名寄　和木香名寄　出来
千代の古道　香道の古実を著す　未刻
校正香道秘傳　附録　奥の枝折
この書は古人の作、香道の古実
なり。古板誤り多し、因って校正す。　出来

元文四年己未五月
堀川高辻上ル丁
京師書房　植村藤右衛門　梓行
通石町三丁目
東都書林　植村藤三郎
高簾橋壱丁目
摂陽書舗　植村藤三郎

令和二年六月

『香筵雅遊』國井和裕